

上深江・小西遺跡 I

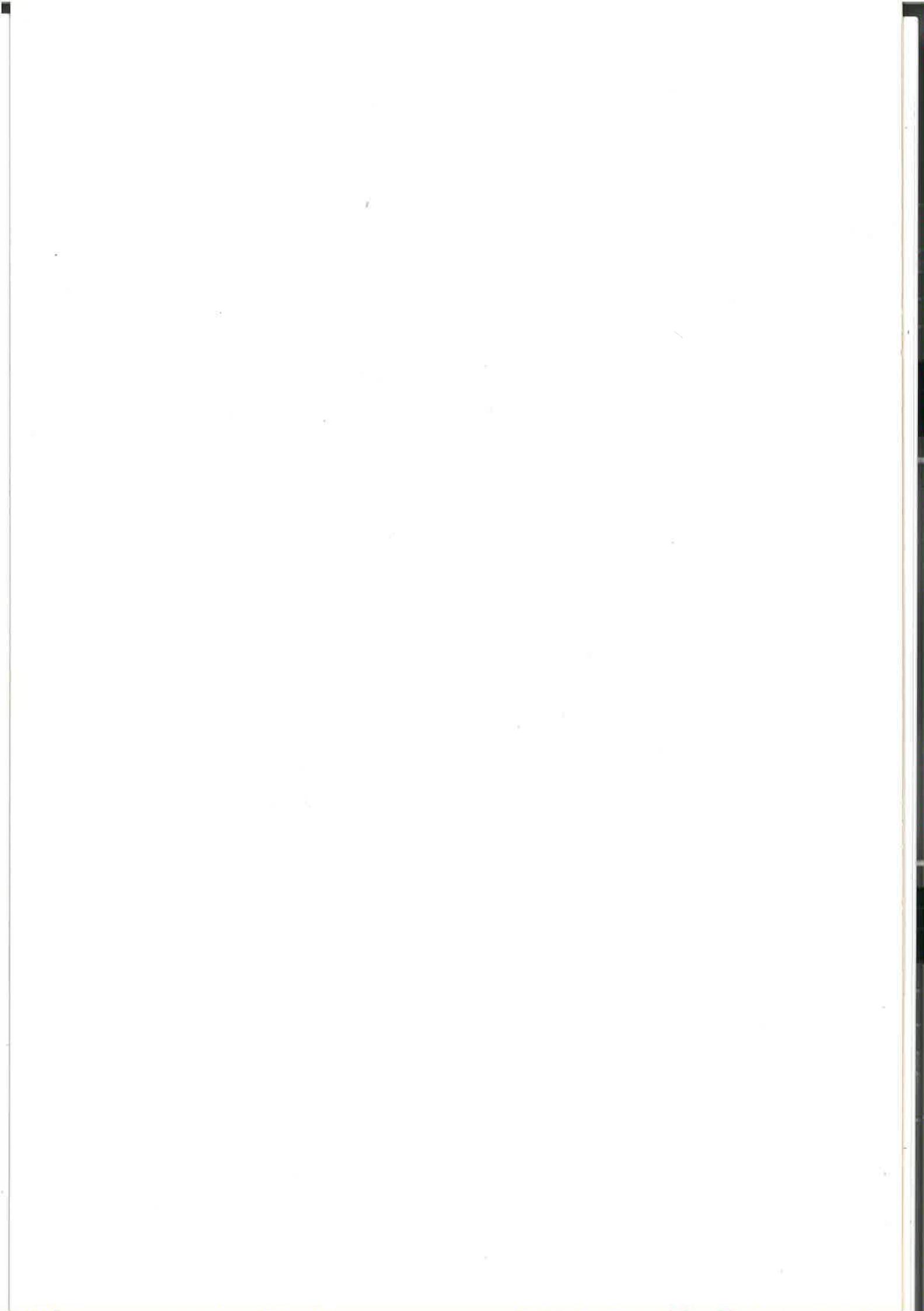
－弥生時代早期・掘立柱建物跡群の調査－

二丈町文化財調査報告書

第 19 集

1 9 9 8

二丈町教育委員会



上深江・小西遺跡 I

—弥生時代早期・掘立柱建物跡群の調査—

二丈町文化財調査報告書

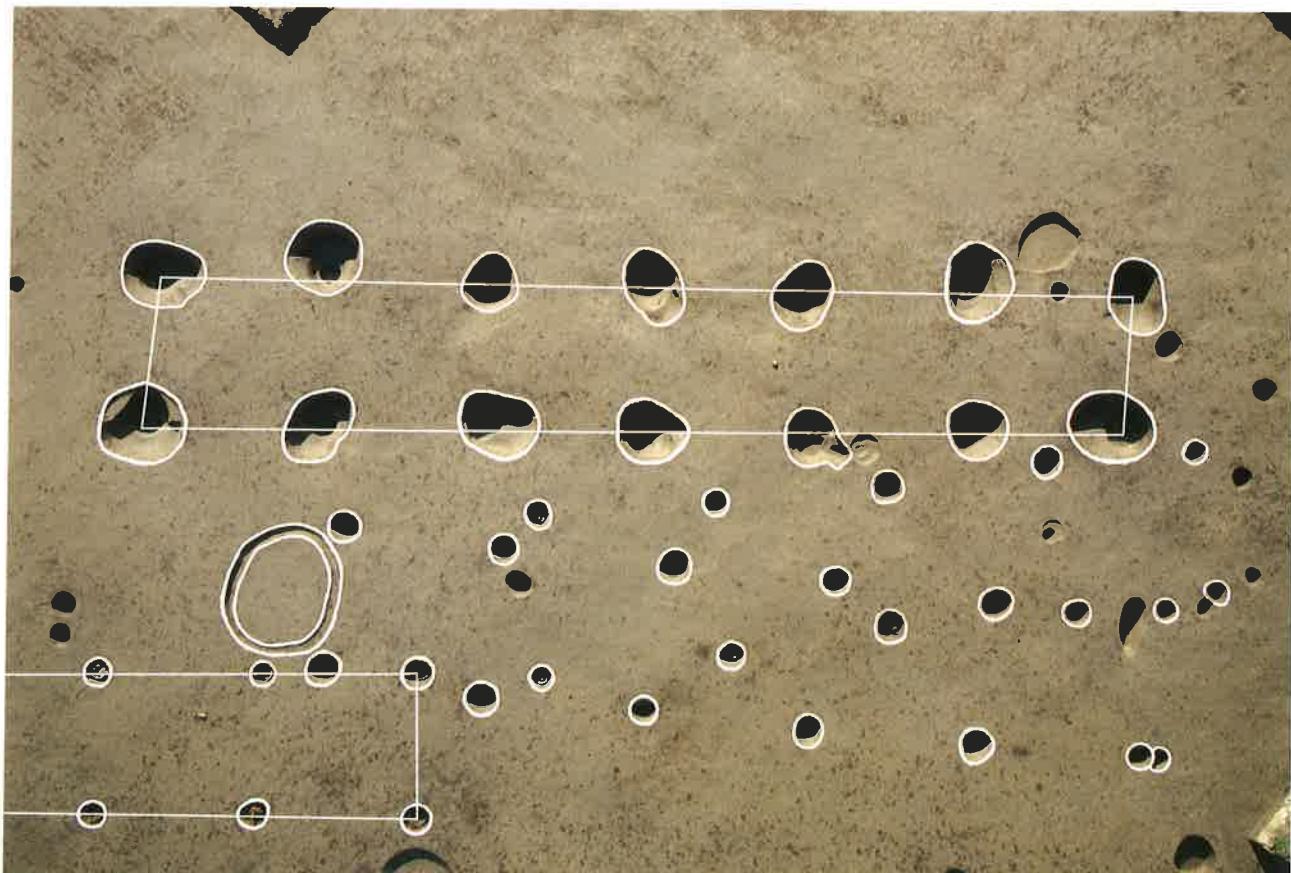
第 19 集

1 9 9 8

二丈町教育委員会



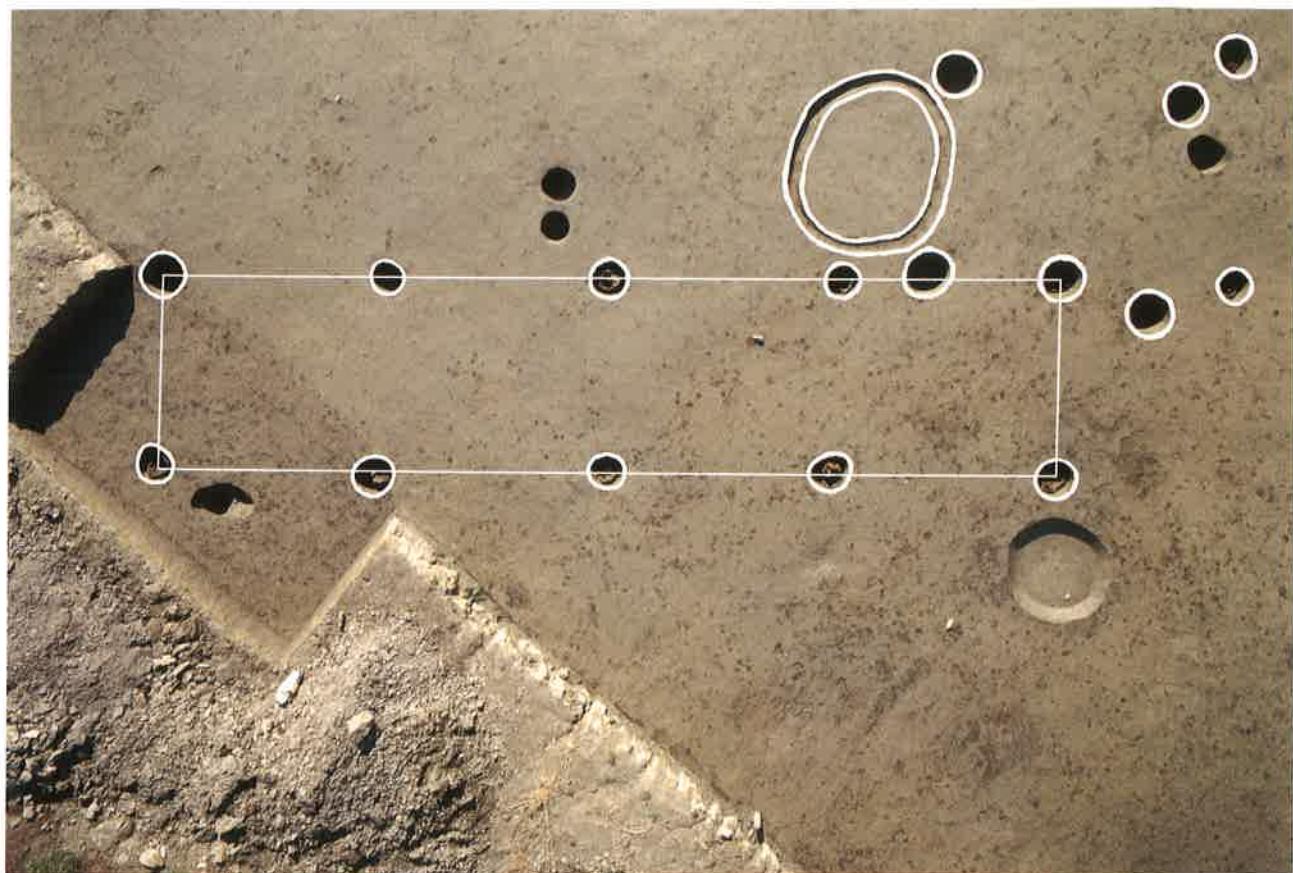
II区 弥生時代早期・掘立柱建物跡群



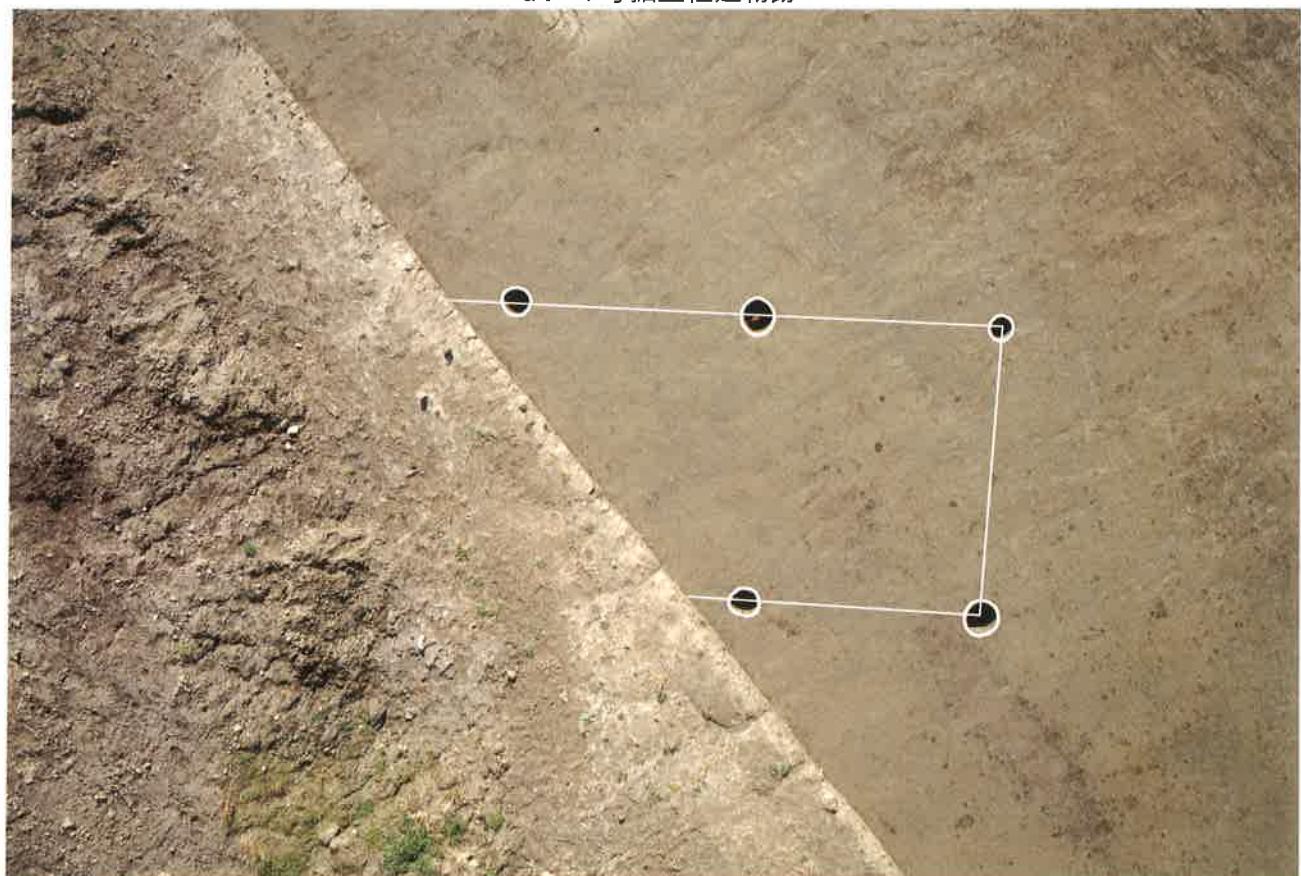
a. 1号, 4号掘立柱建物跡



b. 2号, 3号掘立柱建物跡及び柱穴列



a. 4号掘立柱建物跡



b. 5号掘立柱建物跡



a. 4号掘立柱建物跡 柱穴2



b. 4号掘立柱建物跡 柱穴8



c. 4号掘立柱建物跡 柱穴9



d. 4号掘立柱建物跡 柱穴10

序

この報告書は、平成7年度をもって終了した深江地区ほ場整備に関する埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

本書が考古学研究の基礎資料の一つとなり、文化財の保護と活用に広く利用されることを願います。

平成10年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 小川勇吉

例　　言

1. 本書は深江地区県営ほ場整備事業に伴い、二丈町教育委員会が平成5年度において国庫、県費補助を受けて発掘調査を実施した、二丈町大字上深江字小西に所在する上深江・小西遺跡のうちの、弥生時代の遺構と遺物に関する調査報告書である。
2. 発掘調査は二丈町教育委員会　村上　敦　が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は村上が行ない、製図は村上及び須古井陽子が行なった。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は村上が、製図は村上及び須古井が行ない、打製石器については津國　豊の協力を得た。
5. 遺構・遺物の写真撮影は村上が行ない、空中写真はI区を（株）スカイサーベイに、II区を（有）空中写真企画に委託した。
6. 本書に用いた方位は、全て磁北である。
7. 本書の執筆編集は村上が行なった。

本 文 目 次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査期間.....	1
3. 発掘調査の期間と調査組織.....	1
4. 遺跡の位置と環境.....	3
II.発掘調査の記録.....	6
1. 調査の概要.....	6
2. 弥生時代の遺構.....	8
3. 弥生時代の遺物.....	21
III.おわりに.....	28
1. 掘立柱建物跡について.....	28
2. 柱材の形態について.....	29
3. おわりに.....	30

挿 図 目 次

第1図	深江地区ほ場整備関係遺跡位置図（縮尺1/5,000）	2
第2図	周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）	4
第3図	調査区域図（縮尺1/15,000）	6
第4図	II区弥生時代遺構配置図（縮尺1/150）	7
第5図	1号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/80）	8
第6図	1号掘立柱建物跡 柱穴1～3実測図（縮尺1/30）	9
第7図	1号掘立柱建物跡 柱穴4～6実測図（縮尺1/30）	10
第8図	1号掘立柱建物跡 柱穴7～9実測図（縮尺1/30）	9
第9図	1号掘立柱建物跡 柱穴10～12実測図（縮尺1/30）	10
第10図	1号掘立柱建物跡 柱穴13, 14, 付設土壙実測図（縮尺1/30）	13
第11図	2号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/80）	14
第12図	3号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/80）	15
第13図	4号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/80）	16
第14図	5号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/80）	17
第15図	2号掘立柱建物跡流説土壙実測図（縮尺1/20）	17
第16図	3, 4号掘立柱建物跡付設土壙実測図（縮尺1/20）	20
第17図	円環溝状遺構実測図（縮尺1/0）	20
第18図	柱穴列実測図（縮尺1/80）	20
第19図	柱穴出土土器実測図（縮尺1/3）	22
第20図	柱穴出土石器実測図（縮尺2/3）	23
第21図	包含層出土土器実測図－1（縮尺1/3）	24
第22図	包含層出土土器実測図－2（縮尺1/3）	26
第23図	包含層出土石器実測図（縮尺2/3）	26
第24図	柱穴出土柱材実測図（縮尺1/4）	27

図版目次

- 卷頭図版 1 II区 弥生時代早期・掘立柱建物跡群
- 2 a. 1号, 4号掘立柱建物跡
b. 2号, 3号掘立柱建物跡及び柱穴列
- 3 a. 4号掘立柱建物跡
b. 5号掘立柱建物跡
- 4 a. 4号掘立柱建物跡 柱穴2
b. 4号掘立柱建物跡 柱穴8
c. 4号掘立柱建物跡 柱穴9
d. 4号掘立柱建物跡 柱穴10
- 図版 1 調査区上空唐津湾を望む（空中写真）
- 図版 2 a. II区全景（空中写真）
b. II区南西側上空から見た一貴山・深江平野（矢印は石崎・曲り田遺跡）
- 図版 3 a. 掘立柱建物跡群全景（空中写真、東方上空から）
b. 掘立柱建物跡群全景（空中写真）
- 図版 4 a. 1号, 3号掘立柱建物跡（空中写真）
b. 2号掘立柱建物跡及び柱穴列（空中写真）
- 図版 5 a. 4号掘立柱建物跡（空中写真）
b. 5号掘立柱建物跡（空中写真）
- 図版 6 a. 4号掘立柱建物跡柱穴半割状況（西から）
b. 4号掘立柱建物跡柱穴1半割状況（北から）
c. 4号掘立柱建物跡柱穴2半割状況（北から）
d. 4号掘立柱建物跡柱穴3半割状況（北から）
e. 4号掘立柱建物跡柱穴4半割状況（北から）
- 図版 7 a. 4号掘立柱建物跡柱穴5半割状況（北から）
b. 4号掘立柱建物跡柱穴6半割状況（南から）
c. 4号掘立柱建物跡柱穴7半割状況（南から）
d. 4号掘立柱建物跡柱穴8半割状況（南から）
e. 4号掘立柱建物跡柱穴9半割状況（南から）
f. 4号掘立柱建物跡柱穴10半割状況（南から）
- 図版 8 掘立柱建物跡柱穴出土遺物・1
- 図版 9 掘立柱建物跡柱穴出土遺物・2
- 図版10 包含層出土遺物・1
- 図版11 包含層出土遺物・2
- 図版12 包含層出土遺物・3
- 図版13 包含層出土遺物・4

表 目 次

表 1 深江地区ほ場整備事業関係発掘調査遺跡一覧.....	3
表 2 掘立柱建物跡総括表.....	18

I. はじめに

1. 調査に至る経過

調査原因となった深江地区は場整備事業は平成3年度より開始され、5年の歳月をかけて平成7年度に竣工した。この間、緊急発掘の対象となった遺跡は30,000m²に昇るが、徐々に芽生えた農政関係者の文化財行政への理解により大幅な計画変更が成された部分もあり、試掘調査以前に工事が着工されるといった過去の忌まわしい現実からはようやく脱却した感がある。

上深江・小西遺跡の直接的な調査原因となったものは、用排水路、並びに作業道の建設である。その他の面工事については農政部局との協議の結果、計画変更による客土によって遺跡の破壊を免れ、最終的に調査面積は約3,240m²にとどめることができた。

2. 調査期間 1993（平成5）年7月16日～12月24日

3. 調査組織

発掘調査

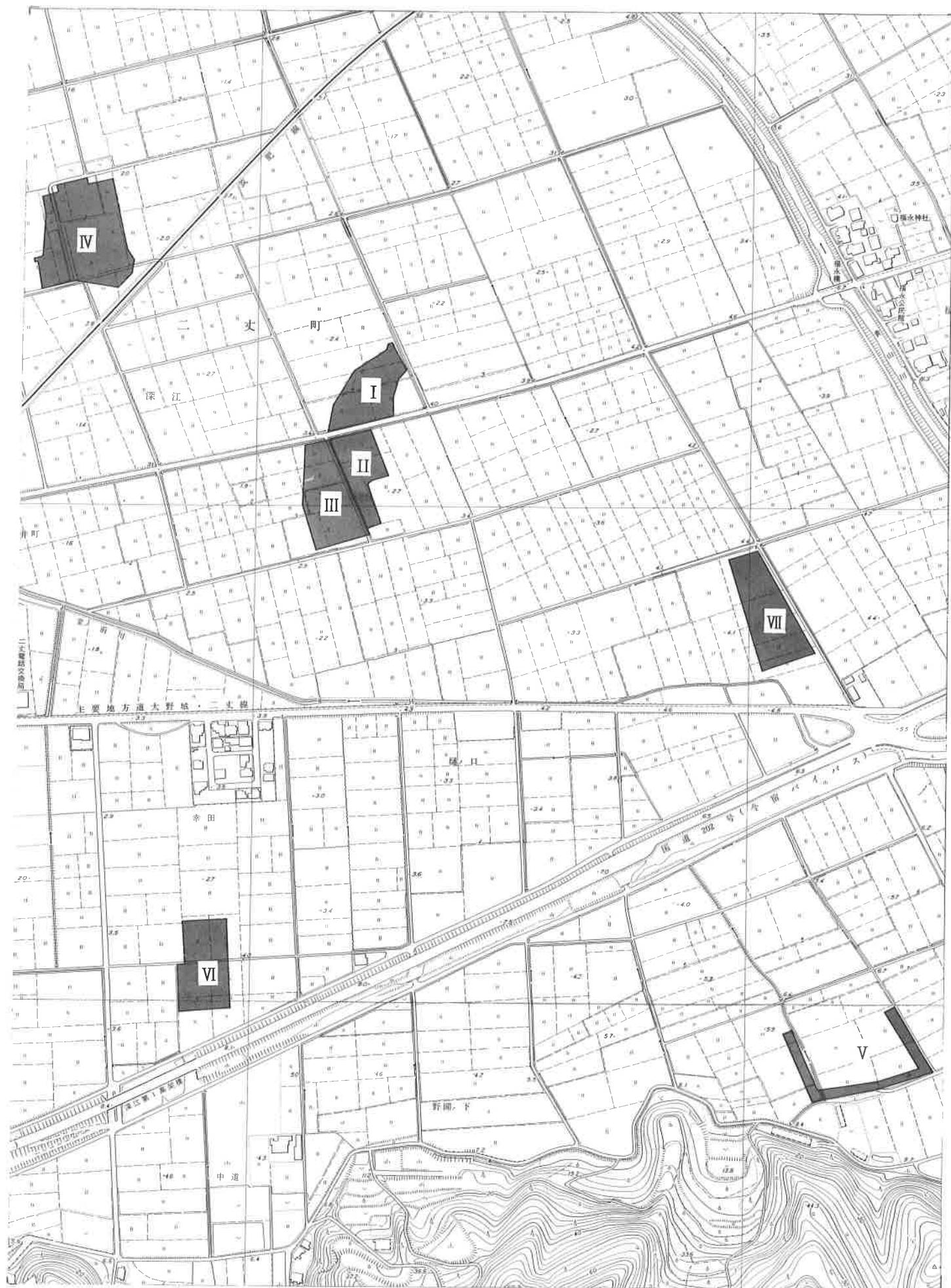
調査主体	二丈町教育委員会	教 育 長	吉村昌幸
調査総括	同	教 育 課 長	庄島 正
	同	教育課長補佐	宮崎晶之
	同	社会教育係長	瀬戸利三
調査担当	同	社会教育係主事	村上 敦
調査作業	内田京子、内田美智子、古賀久美子、須古井節子、田中栄一、田中和子、 田中靖子、田中ミヨ子、古川智恵子、松村マサ子、瀬戸利彦、浜田公彦		

報告書作成

調査主体	二丈町教育委員会	教 育 長	吉村昌幸(平成9年10月まで) 小川勇吉(から)
------	----------	-------	------------------------------

調査総括	同	教 育 課 長	空閑俊明
	同	教育課長補佐	清水泰次
	同	社会教育係長	大庭一成
調査担当	同	社会教育係主事	村上 敦

遺物整理作業 木下文子、古藤紀子



第1図 深江地区ほ場整備関係調査遺跡位置図（縮尺1/5,000）

表1 深江地区ほ場整備関係発掘調査遺跡一覧

調査地点	遺跡名	調査年度	調査面積 (m ²)	調査主体	主な時代	主な遺構	主な遺物	報告書	備考
I	木舟・三本松遺跡	1991	3,000	二丈町教育委員会	弥生中期	甕棺墓	硬玉製勾玉、磨製石劍、等	「木舟・三本松遺跡」1994	1次調査
II	木舟・三本松遺跡	1994	2,850	二丈町教育委員会	弥生中期 11世紀	甕棺墓 土壙群	碧玉製管玉、等 土師器、等	「木舟・三本松遺跡Ⅱ」1996	2次調査
III	木舟・三本松遺跡	1995	3,600	二丈町教育委員会	弥生中期	甕棺墓、溝状遺構、木棺墓	碧玉製管玉、等 輸入陶磁器、	「木舟・三本松遺跡Ⅲ」1997	3次調査
IV	木舟の森遺跡	1992	7,000	二丈町教育委員会	12世紀	溝状遺構	輸入陶磁器、瓦器、黒色土器、等	「木舟の森遺跡」1995	
V	上深江・小西遺跡	1993	3,240	二丈町教育委員会	縄文後期 弥生早期	竪穴住居 掘立柱建物	縦長剥片 柱根	未報告 本報告	
VI	深江・中道遺跡	1995	4,200	二丈町教育委員会	縄文～古墳	溝状遺構	注口土器	未報告	
VII	森田遺跡	1995	5,400	二丈町教育委員会	13世紀	製鉄炉、精練炉 中世墓	鉄滓、古銭、青磁	未報告	

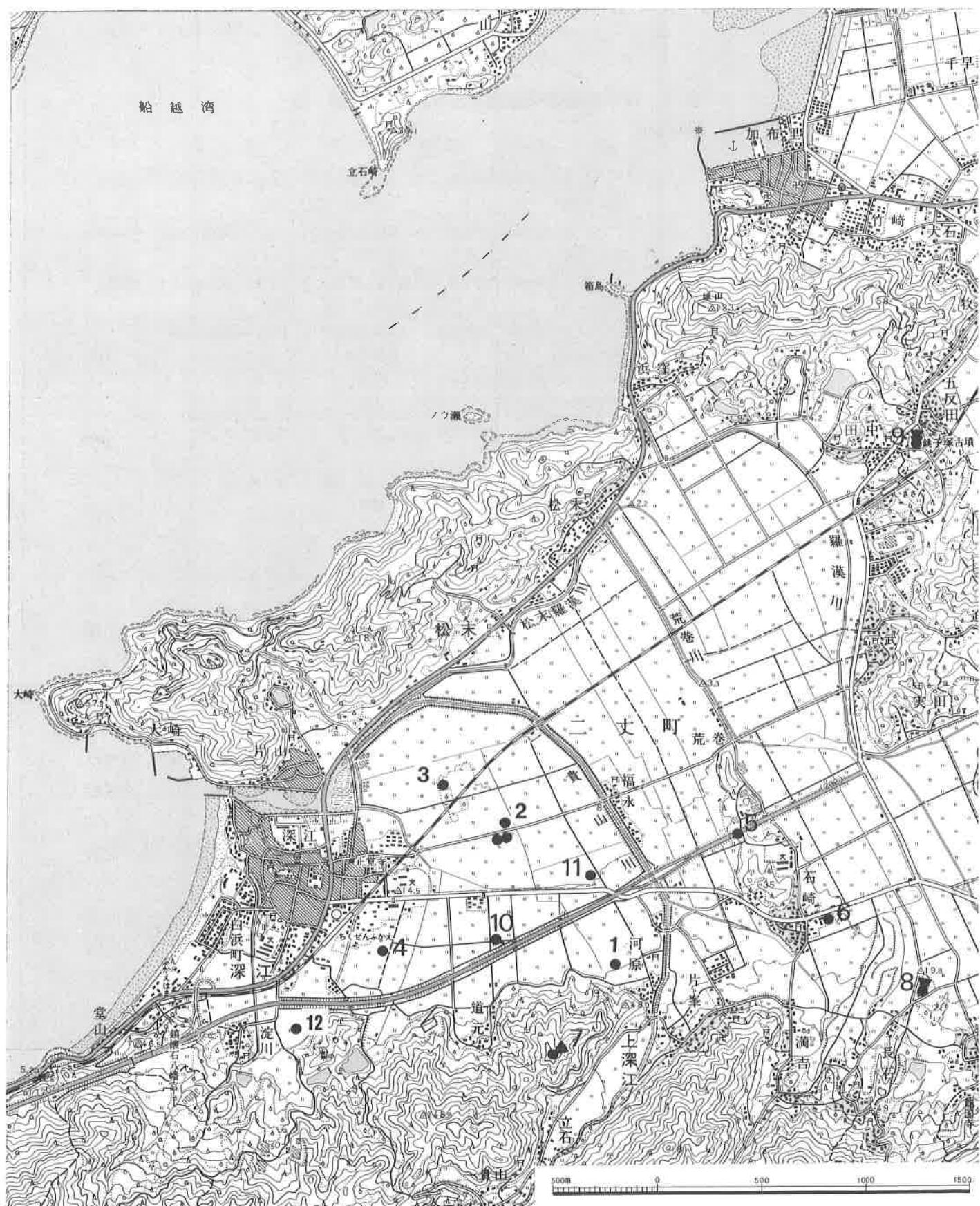
2. 遺跡の位置と環境

上深江・小西遺跡は、一貴山川によって二分された一貴山・深江平野の西側の南東部に位置する。古くから水田として利用されていた場所ではあるが、調査以前の空中写真によれば、かつては山裾の微高地であったことが分かり、条里には著しい乱れがある。遺跡の背面に迫る山麓には前期の前方後円墳である徳正寺山古墳、北東方約1kmには稻作開始期の集落として著名な石崎・曲り田遺跡があるなど、重要な遺跡の集中する地域であるが、昭和56年に発行された遺跡分布地図には白地となっており、周辺の耕作者以外に遺跡の存在を知るものはいなかったようである。

今回の調査によって確認された遺構群は、縄文時代後期中葉に位置付けられる北久根山式期の竪穴式住居群、並びに弥生時代早期の掘立柱建物群である。

調査地点の標高は7m前後であり、現在の海岸線からは約2kmの距離にあるが、縄文海進期においては一貴山・深江平野の大部分が海域であったものと思われ、当時は海岸に臨接した地形を呈していたものと考えられる。しかしながら、海に依存した生活を示す遺物の出土は殆どなく、多量に出土した石斧、石鎌といった遺物からは、山地に依存した生活が予想される。またこのことは、やがていち早く稻作文化を受容し、継承、発展させる上で重要な意味合いをもつに至ったものと考えられる。

稻作が定着し、人々がその収穫に生活の大部分を依存するようになったであろう弥生時代早期においては、海岸線はかなり現在の地形に近いものとなり、一貴山・深江平野の大部分は陸地化するものとなった。しかしながら、その多くは塩気を含んだ湿地帯であったと予想され、人々の生活の拠点は山地沿いの洪積地に限られていたようである。故に、湿地帯の中に島状に形成された砂丘に墓域を形成するといった土地利用の苦勞も窺えるが、これらの低地に農地として本格的に人間の手が加えられるのは、平安時代以降の事であったようである。



第2図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）

- | | | | |
|--------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 上深江・小西遺跡 | 2. 木舟・三本松遺跡 | 3. 木舟の森遺跡 | 4. 深江・井牟田遺跡 |
| 5. 石崎・曲り田遺跡 | 6. 石崎・矢風遺跡 | 7. 德正寺山古墳 | 8. 波呂・二塚古墳 |
| 9. 一貴山・銚子塚古墳 | 10. 深江・中道遺跡 | 11. 森田製鉄遺跡 | 12. 塚田南遺跡 |

弥生時代全般における一貴山・深江平野周辺の拠点は、その西端に位置する深江地区遺跡群、南端に位置する石崎地区遺跡群の2つに大きく分けられる。深江地区遺跡群の中心は、弥生時代終末期の青銅製短剣や樂浪系漢式土器を出土した深江・井牟田遺跡周辺の区域であると考えられるが、その一帯は砂地で形成されており、農耕に不適な環境にある。恐らく、この地域において弥生時代前期以前の遺物が全くといっていいほど出土しないのは、その立地環境に大きな要因があると思われ、この深江地区遺跡群が始めて繁栄をみるのは、中期後半以降の事である。この中期後半という時期は、伊都国最初の王墓とも言われる三雲・南小路遺跡の出現に象徴されるように、糸島地域におけるひとつの大きな画期であり、このことが深江地区遺跡群の繁栄と無関係であるとは考えられない。また、時を同じくして深江・井牟田遺跡と同様に唐津湾に隣接し、農耕に不適な立地環境にある御床・松原遺跡にも発展の兆しがみえ、この時期において初めて、それまではあまり重要視されることのなかった不毛とも言えるこれらの土地が、大陸への門戸としてその価値を見出だされるに至ったのであろう。

これらに対して石崎地区遺跡群は、脊振山地系の山裾に広がる洪積台地上に位置し、現在までのところ、縄文時代中期以降の遺物、遺構が散発的にではあるが確認されており、弥生時代早期以降になるとその数は飛躍的に増加する傾向がみられる。この地は、稻作開始期の集落として著名な石崎・曲り田遺跡、前期の水田が確認された石崎・大坪遺跡に象徴されるように、稻作開始期以来の水田農耕に基盤をもつ典型的な弥生社会を形成するに適した立地環境にあったものと思われ、この他にも前期の支石墓、甕棺墓、木棺墓から成る石崎・矢風遺跡などが発掘調査されている。この石崎地区遺跡群の中心部は、未だ発掘調査の手が及んでいない現在の石崎集落とその南側の微高地にあるものと予想され、夜臼期の丹塗磨研壺を用いる土器棺が出土したと伝えられる五九遺跡、県道大野城・二丈線建設のおり銅鉈と管玉百数十個が副葬された須玖式の甕棺が掘り出された小路遺跡、宅地造成のおり硬玉製の勾玉が出土した金江遺跡などが知られ、さらに重要な遺跡の存在が窺える。また、このような状況からみると、稻作開始期の集落遺跡として知られる石崎・曲り田遺跡、今回報告する上深江・小西遺跡はその周辺部に位置していることになり、今までに発掘調査された遺跡は、この遺跡群の全容を解明するうえではほんの序章といった程度のものでしかないものなのであろう。

また、深江・石崎の両遺跡群のほぼ中間地点には、弥生時代中期の甕棺墓群である木舟・三本松遺跡がある。この遺跡は湿地に囲まれた砂丘上につくられた墓群であり、遺構には伴わないものの弥生時代早期の朝鮮系丹塗磨研壺や支石墓の上石であったと思われる大石が検出されるなどその始まりは稻作開始期に遡るもの、盛況する時期は弥生時代中期中葉であり、石崎地区遺跡群の拡大に伴い、その周辺部が墓域として利用されたものであると考えられる。またこの頃から、深江地区遺跡群においても散発的に遺構、遺物の出土がみられるようになり、深江地区遺跡群にも発展の兆しが現れる。つまり深江地区遺跡群の成り立ちは、石崎地区遺跡群の発展、拡大の結果によるものであり、農耕に適さない土地での集落の存在は、石崎地区遺跡群という基盤、さらには、伊都国を中心とした三雲・井原地区遺跡群という背景なしにはあり得ないものであったであろう。なお、時代をかなり下っての話であるが、和名類聚抄に記される怡土郡の郷名のうち、石田郷は石崎地区、海部郷は深江地区に比定され、深江地区が依然として弥生時代からの流れをくんでいることが分かる。

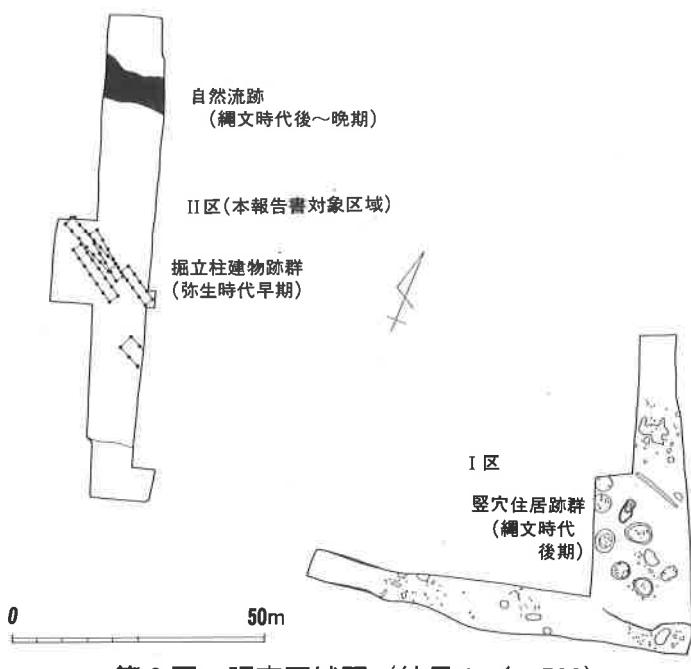
II. 発掘調査の記録

1. 調査の概要

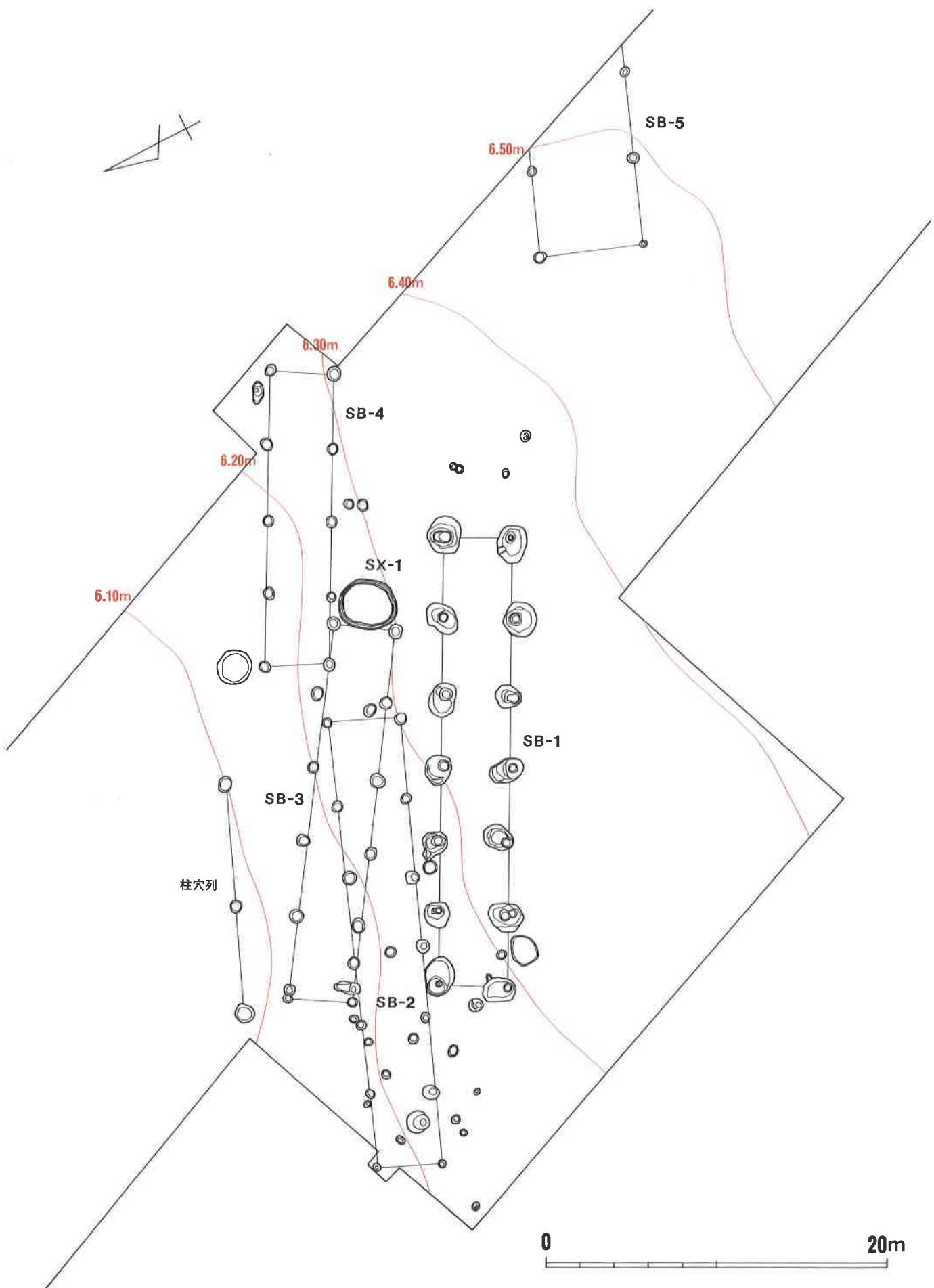
前述したように、調査の原因となったものはほ場整備に伴う農道、並びに用排水路の建設によるものであり、埋蔵文化財の確認された区域内において、これらによって破壊、或いは永久的に調査が行なえ得ない場所となる部分のみの調査を行なうこととし、調査区を設定した。また発掘調査が進むうちに、住居跡や建物跡が調査区外に延長しているなどして遺構の全容をつかめない部分が生じたため、これらについては最低限必要な限りにおいて調査区を拡大し調査を行なうとともに、当初調査区に設定しながら遺構、遺物の検出されなかった部分については調査区から除外した。その為、結果的に調査区はやや歪な形になっているところもある。調査区は概ね凹形を呈し、既存の水路を挟んで東側をI区、西側をII区とした。

I区においては、縄文時代後期の4基の竪穴住居跡のほか、貯蔵穴、溝状遺構、配石遺構、並びに石器製作工房跡と類される剥片、チップなどが集中する部分などが検出された。特徴的な遺物は、大量に出土した黒曜石製の縦長剥片と、剥片石器であり、その実数は現段階では確認できていないが、縦長剥片だけでも数千点に昇るものと思われる。土器型式については今後の分析に依るところが多いが、古くは後期中葉の鐘崎式に始まり、後期後半の三万田式まで確認される。また、最も遺物量の多い時期は北久根山式期であり、住居跡の埋土に包含される土器はこの型式に属するものである。また、竪穴住居跡群の南部には、東西方向に帶状に浅く掘り込まれた部分があり、重機による表土除去作業段階から相当量の縦長剥片等の黒曜石が出土していた。精査の結果、チップが著しく集積する部分が検出され、その周辺の50cm四方の埋土をサンプリングし水洗したところ、千点以上の5mm以下のフレークが検出された。またこれらに伴って台石や敲石などが出土おり、この地点、或いはその周辺部において、石器の製作が行なわれた可能性が高いものであると考えられる。

II区の中央部では弥生時代早期の掘立柱建物跡群、北端部からは縄文時代後期の自然流路が検出された。この自然流路は東西方向に延びており、大量の粗製土器、石器などが出土した。また、ここから出土した黒曜石製の石器、縦長剥片などは、I区で出土したものと比較すると、その小形化とともに材質の粗悪化が顕著であり、時期差による



第3図 調査区域図 (縮尺 1/1,500)



第4図 II区弥生時代遺構配置図（縮尺1/150）

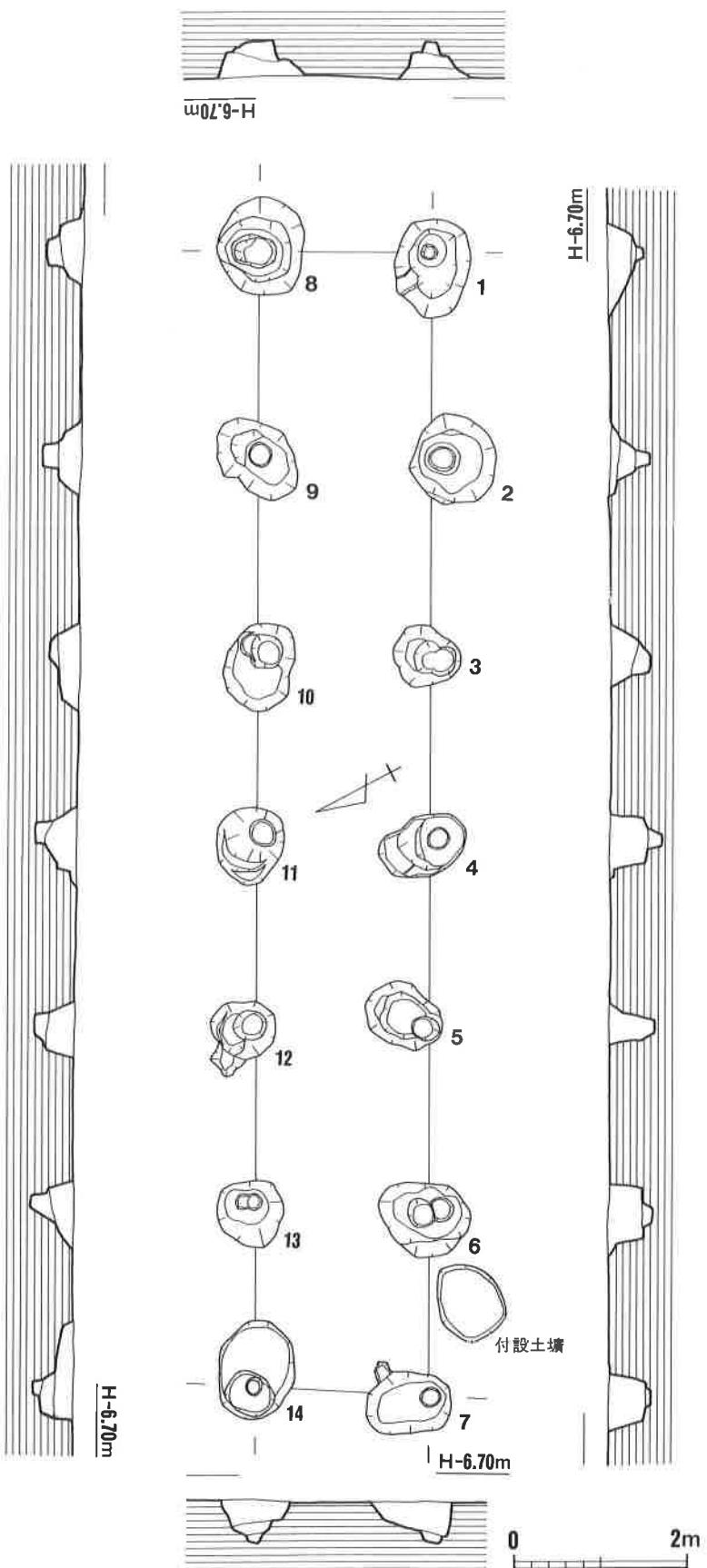
黒曜石の供給先の異変、入手ルートの変化などの何らかの状況を示しているものと考えられる。

2. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、II区の中央部に位置する。中心的な遺構は掘立柱建物跡であり、5棟分が検出された。全て弥生時代早期（縄文時代晚期後半）に位置づけられるものである。

1号掘立柱建物跡（SB-1）

桁行6間、梁行1間の規模をもつ掘立柱建物である。主軸方位はほぼ東西方向のN-62°-Wを示す。北側桁行13.29m、南側桁行13.33m、東側梁行2.00m、西側梁行2.04mを測り、柱穴の間隔は、南側桁行柱穴1から柱穴2は2.39m、柱穴2から柱穴3は2.37m、柱穴3から柱穴4は2.08m、柱穴4から柱穴5は2.19m、柱穴5から柱穴6は2.18m、柱穴6から柱穴7は2.12m、北側桁行柱穴8から柱穴9は2.42m、柱穴9から柱穴10は2.30m、柱穴10から柱穴11は2.11m、柱穴11から柱穴12は2.22m、柱穴12から柱穴13は2.08m、柱穴13から柱穴14は2.16m、桁行は東側から柱穴1から柱穴8は2.00m、柱穴2から柱穴9は2.10m、柱穴3から柱穴10は2.02m、柱穴4から柱穴11は2.02m、柱穴5から柱穴12は1.98m、柱穴6から柱穴13は1.94m、柱穴7から柱穴14は2.04mを測る。平均すると桁行



第5図 1号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/80）

2.22m、梁行2.01mである。柱穴には全て抜き取られた痕跡があり、円形、または橢円形を基本と成す。

柱穴 1

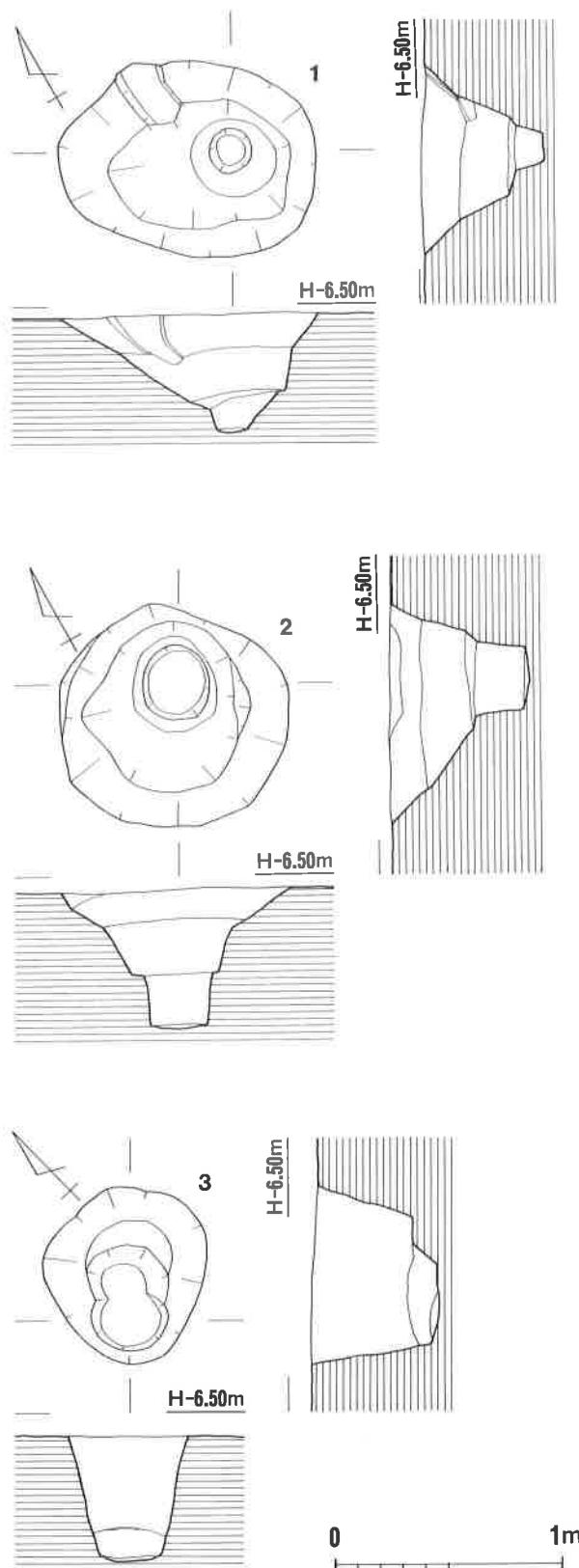
柱穴掘形は長径115cm、短径85cmの桁行方向に長軸をもつ橢円形を呈し、深さは50cmを測る。西側の壁面の傾斜が緩くなっているのは、柱を挿入し易くするためのものであると考えられ、桁行方向と梁行方向のほぼ中位に、窪み状の痕跡が残される。この窪みは、柱材の抜き取り坑よりも古い段階に生じたものであり、柱を挿入する時点に生じたものと考えられる。柱の抜き取り坑は長さ100cm、幅50cm、深さ30cmの橢円形を呈する。この坑は柱の底面までは達しておらず、柱痕の断面は東側に傾斜しているので、東側に柱材を傾けた後に切断されたものであろう。柱痕は中心部のやや東寄りに位置しており、径は25cmを測る。

柱穴 2

柱穴掘形は径95~102cmを測る円形を呈し、深さは61cmを測る。南側の壁面の傾斜が緩く、柱はこの方向から挿入されたものと思われる。また、柱の抜き取り坑は径70cmの円形を呈し、断面形は深さ35cmのすり鉢状を呈する。また、西側には押し付けられたようにプランに乱れがあり、柱材はこの方向に傾けて抜き取られたものであると思われ、柱痕断面も西側に傾いている。柱痕は柱穴の中心よりも北側に偏った位置にあり、前記した状況により歪んでいるが径25~28cmを測る。

柱穴 3

見掛け上の柱穴掘形は、長軸78cm、短軸72cm、深さ55cmを測る不整円形を呈し、北側の一部を柱材の抜き取り坑によって切られる。



第6図 1号掘立柱建物跡柱穴1~3実測図(縮尺1/30)

柱材の抜き取り坑は長径75cm、短径50cmの楕円形を呈し、断面形は深さ25cmのすり鉢状を呈する。柱材はこの坑の長軸方向である北側に傾けられて抜き取られたものであると考えられ、掘形底部の柱痕プランの乱れもこの段階に生じたものであると思われる。柱痕の径は26cmを測る。

柱穴 4

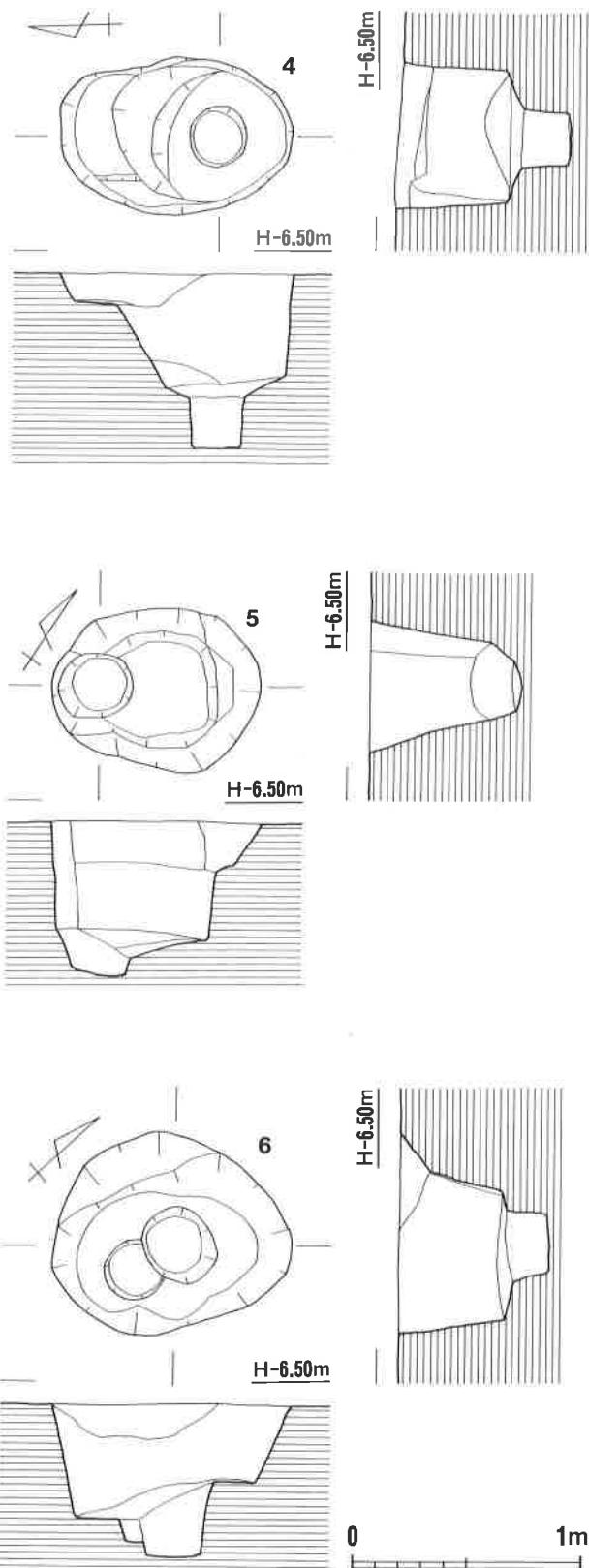
見掛け上の柱穴掘形は長径102cm、短径69cmの楕円形を呈し、深さは76cmを測る。掘形の北側壁面には段状に傾斜する部分があり、この方向から柱材が挿入されたものと思われる。柱の抜き取り坑は、長軸方向が柱穴掘形と等しい長径90cm、短径65cmの不整楕円形を呈し、深さ25cmのすり鉢状を呈する。本来の柱穴掘形のプランは部分的にこの抜き取り坑によって切られており、径80cm程度の不整円形を呈していたものと推定できる。柱痕は中心よりも北側に偏った位置にあり、径23cmを測る。

柱穴 5

柱穴掘形は長軸92cm、短軸70cmを測る楕円形を呈し、深さは76cmを測る。柱痕は柱穴掘形の南端に位置しており、柱材はその壁面に密着して立てられていたものと思われる。柱材の抜き取り坑は、柱穴掘形のプランをその南側において一部破壊しており、長径85cm、深さ40cmの不整楕円形を呈し、柱材は北方向から抜き取られている。柱痕の径は23cmを測る。

柱穴 6

見掛け上の柱穴掘形は、長径106cm、短径86cmを測る不整円形を呈し、深さは70cmを測る。西側の壁面上位には傾斜が緩くなる部分があり、この方向から柱材が挿入されたもの



第7図 1号掘立柱建物跡柱穴4～6実測図(縮尺1/30)

であると考えられる。柱材の抜き取り坑は北方向に長軸をもつ長径100cm、短径65cmの楕円形を呈する。柱痕は径25cmを測り、柱穴の南寄りの位置から中心部寄りの位置へと据え直した痕跡が認められる。

柱穴 7

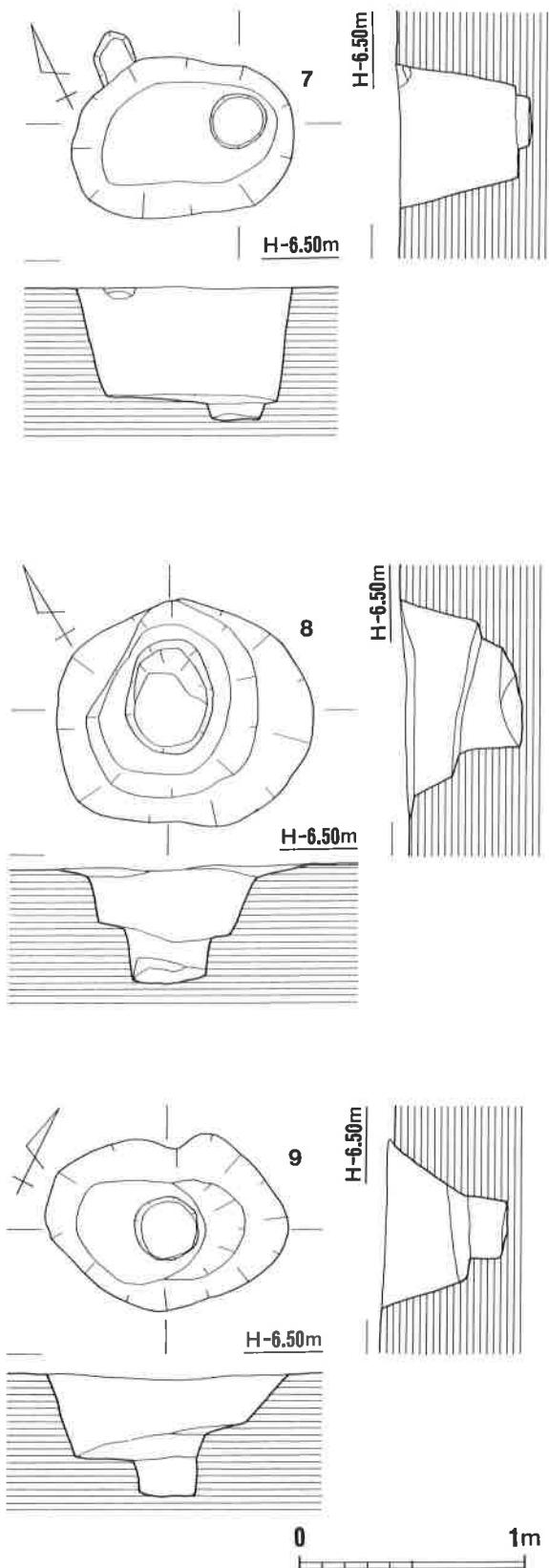
柱穴掘形は、長軸100cm、短軸71cmを測る楕円形を呈し、深さは59cmを測る。柱穴掘形の北東部上面には、柱材を挿入する時点で生じたものと思われる窪みが残され、この方向から柱材が挿入されたものと考えられる。柱材の抜き取り坑は、柱穴掘形より一回り小さな長径80cm、短径60cmの楕円形を呈する。柱痕は径24cmを測り、柱穴の北端部に位置する。

柱穴 8

柱穴掘形は長軸115cm、短軸100cm、深さは50cmの長円形を呈する。柱材の抜き取り坑は、長径90cm、短径80cmの不整形を呈し、長軸は北側に張り出している。柱材はこの方向に向かって押し倒されたものと考えられ、柱痕にも同一方向に向かって柱材がずれた痕跡が認められる。柱痕の径は35cmを測るが、柱材の径はこれよりも一回り小さなものであろう。

柱穴 9

見掛け上の柱穴の掘形は長軸109cm、短軸73cm、深さ53cmの西側にくびれをもつ長円形を呈する。本来の柱穴掘形プランは南半部を柱材抜き取り坑によって切られているが、径70cm程度の不整円形を呈するものと思われ、北側の壁面の傾斜が緩く、南側の壁面推定ラインは柱痕に著しく近接することから、柱材の挿入は北方向から行われたものと考えられる。柱材抜き取り坑は長径90cm、短径70cmの楕円形を呈し、柱痕径は25cmを測る。



第8図 1号掘立柱建物跡柱穴7～9実測図(縮尺1/30)

柱穴10

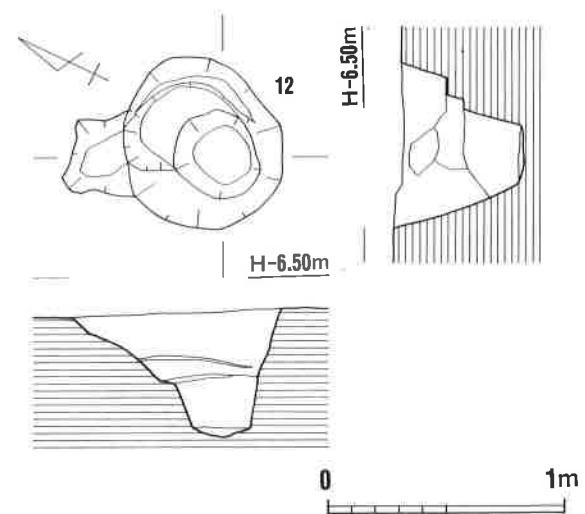
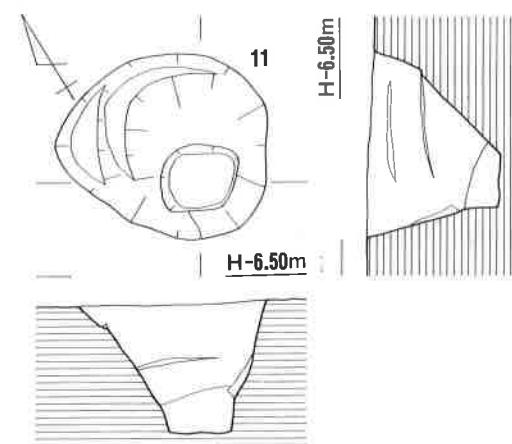
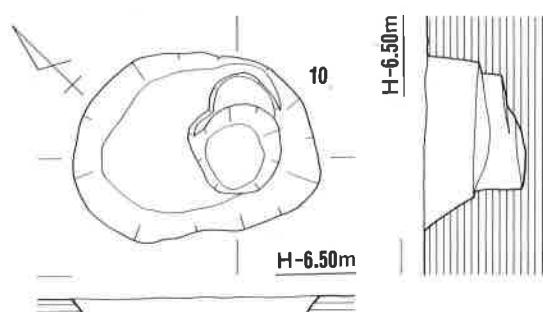
柱穴掘形は長軸103cm、短軸76cmの不整橢円形を呈し、深さは51cmを測る。掘形床面に検出された柱痕は東側に偏った位置にあり、床面の西半部が広くなっているので、柱材の挿入は西方向から行われたものと考えられる。柱材の抜き取り坑は長径90cm、短径50cm、深さ20cmの北西部が張り出す不整橢円形を呈し、この張り出し方向から柱材を抜き取ったものであろう。また、柱痕の北側底面は段状を呈しやや歪な形になっているが、深さ20cm以下の柱痕には動かされた形跡はないので、建築時に柱を据え直した痕跡であると考えられる。柱痕径は25cmを測る。

柱穴11

柱穴掘形は、長軸90cm、短軸79cmの不整円形を呈する。柱材の抜き取り坑は、長径70cm、短径55cm、深さ30cmを測る橢円形を呈し、長軸方向は柱穴掘形の長軸方向と直交する。柱材の抜き取りは、柱材を東方向に傾けて切断したものであり、深さ30cm以下には柱痕が東側に約30°傾いている状況が確認された。柱痕径は26cmを測る。

柱穴12

見掛け上は北西側に大きな張り出しをもつ歪な形を呈しているが、この部分は柱材の抜き取り坑の一部であり、本来の柱穴掘形は径67~75cm程度の円形を呈していたものと思われ、深さは52cmを測る。柱材の抜き取り坑は、張り出し方向に長軸をもつ長径80cm、短径50cm、深さ30cmの不整形を呈し、柱材はこの張り出し方向から抜き取られたものであると考えられる。なお、深さ30cm以下の柱痕は旧状を保っており、この深さまで抜き取りの為に掘り下げた時点で、柱材を切断したものと考えられる。柱痕は中心よりもやや南寄りに位



第9図 1号掘立柱建物跡柱穴10~12実測図(縮尺1/30)

置し、径は21~24cmを測る。

柱穴13

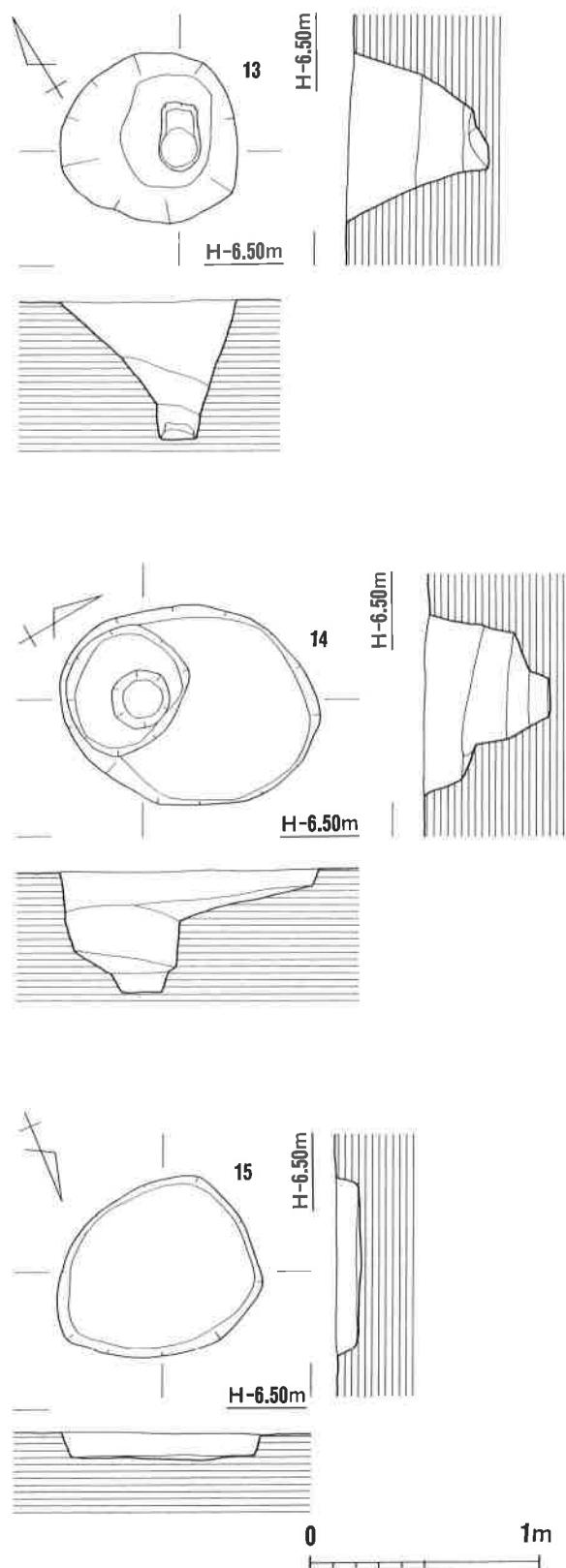
柱穴掘形は径75~78cmの不整円形を呈し、深さは59cmを測る。柱材の抜き取り坑は、長径65cm、短径60cmの不整形を呈し、深さは最深部で28cmを測る。柱痕は中心部より東寄りに位置し、径17cmを測る。

柱穴14

柱穴掘形は長径116cm、短径88cmの楕円形を呈し、深さは52cmを測る。柱材の挿入は壁面の傾斜が緩い北側から行なわれたものと考えられる。また、柱材の抜き取り坑は長径80cm、短径50~60cmの歪な楕円形を呈する。深さは10cm程度であり、柱材を東側に傾けて切断したものと思われ、柱痕は東側に傾いた状態で検出された。径は30cmを測る。

1号掘立柱建物跡付設土壤

柱穴6と柱穴7に近接し、それらを結ぶ軸線のやや外側に位置する土壤である。長径93cm、短径76cmの不整楕円形を呈し、深さは10cmを測る。形態は異なるものの、他の掘立柱建物跡にも類似した位置（両者ともに、最端部の桁行間）に土壤があり、何らかの機能をもって建物跡に付随する遺構であると考えられる。また、少なくとも1号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡の2棟の建物跡は、その柱痕、或いは残された柱材の規模からみて、高床式の建物を想定することが可能であり、高床部への昇降施設の痕跡であると考えられ、その場合、それぞれの形状からみて、1号掘立柱建物跡のものは幅広の仮設的なもの、4号掘立柱建物跡のものは丸太状の幅が狭く常設的なものであると想定される。

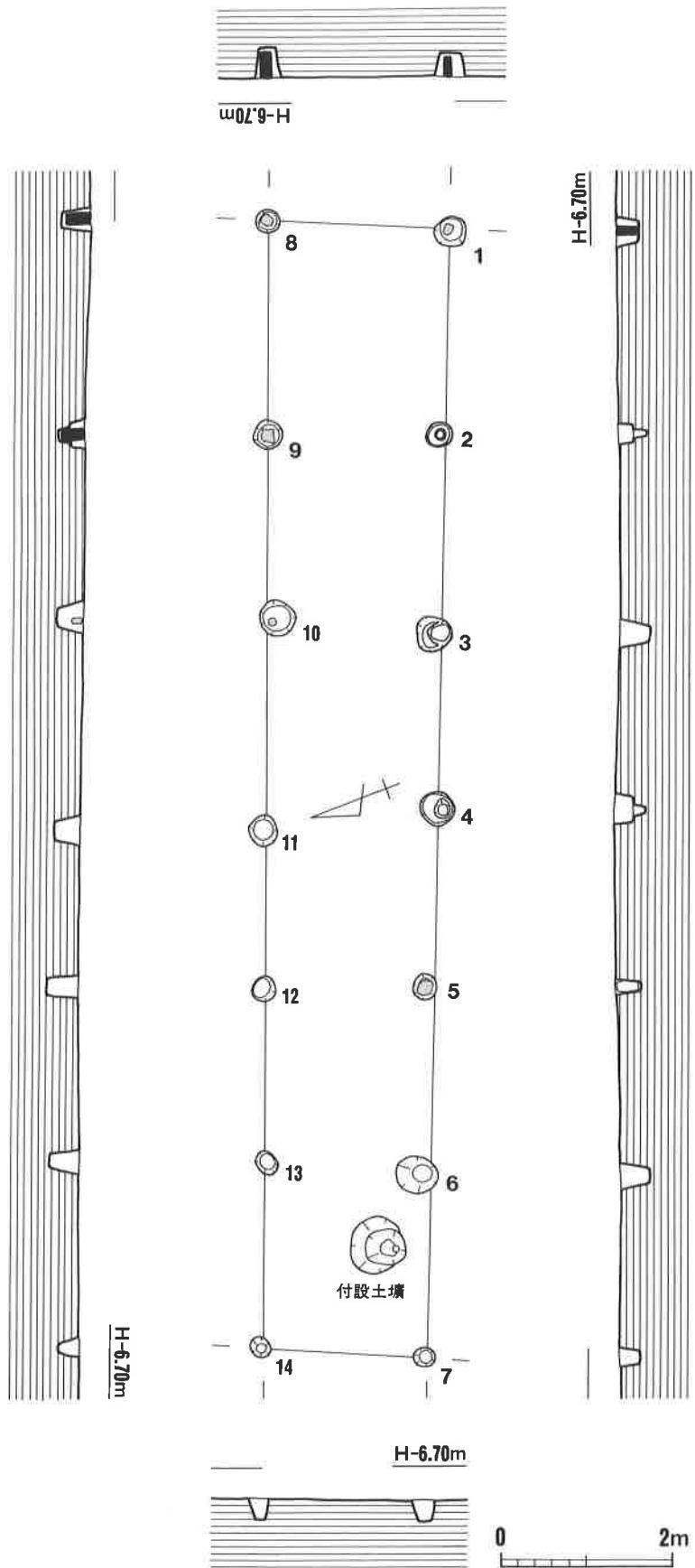


第10図 1号掘立柱建物跡柱穴13, 14, 付設土壤実測図
(縮尺1/30)

2号掘立柱建物跡(SB-2)

SB-1の北側に隣接し、それと同様に桁行6間、梁行1間の規模をもつ掘立柱建物である。主軸方位はN-69°-Wを示し、SB-1よりもやや北側にふれる。北側桁行13.20m、南側桁行13.22m、東側梁行2.18m、西側梁行1.95mを測り、柱穴間隔は、南側桁行柱穴1から柱穴2は2.43m、柱穴2から柱穴3は2.32m、柱穴3から柱穴4は2.15m、柱穴4から柱穴5は2.10m、柱穴5から柱穴6は2.16m、柱穴6から柱穴7は2.15m、北側桁行柱穴8から柱穴9は2.54m、柱穴9から柱穴10は2.18m、柱穴10から柱穴11は2.46m、柱穴11から柱穴12は2.01m、柱穴12から柱穴13は2.02m、柱穴13から柱穴14は2.19m、梁行は東側から、柱穴1から柱穴8は2.18m、柱穴2から柱穴9は2.05m、柱穴3から柱穴10は1.99m、柱穴4から柱穴11は2.01m、柱穴5から柱穴12は1.93m、柱穴6から柱穴13は1.80m、柱穴7から柱穴14は1.95mを測り、平均値は、桁行2.23m、梁行1.99mである。

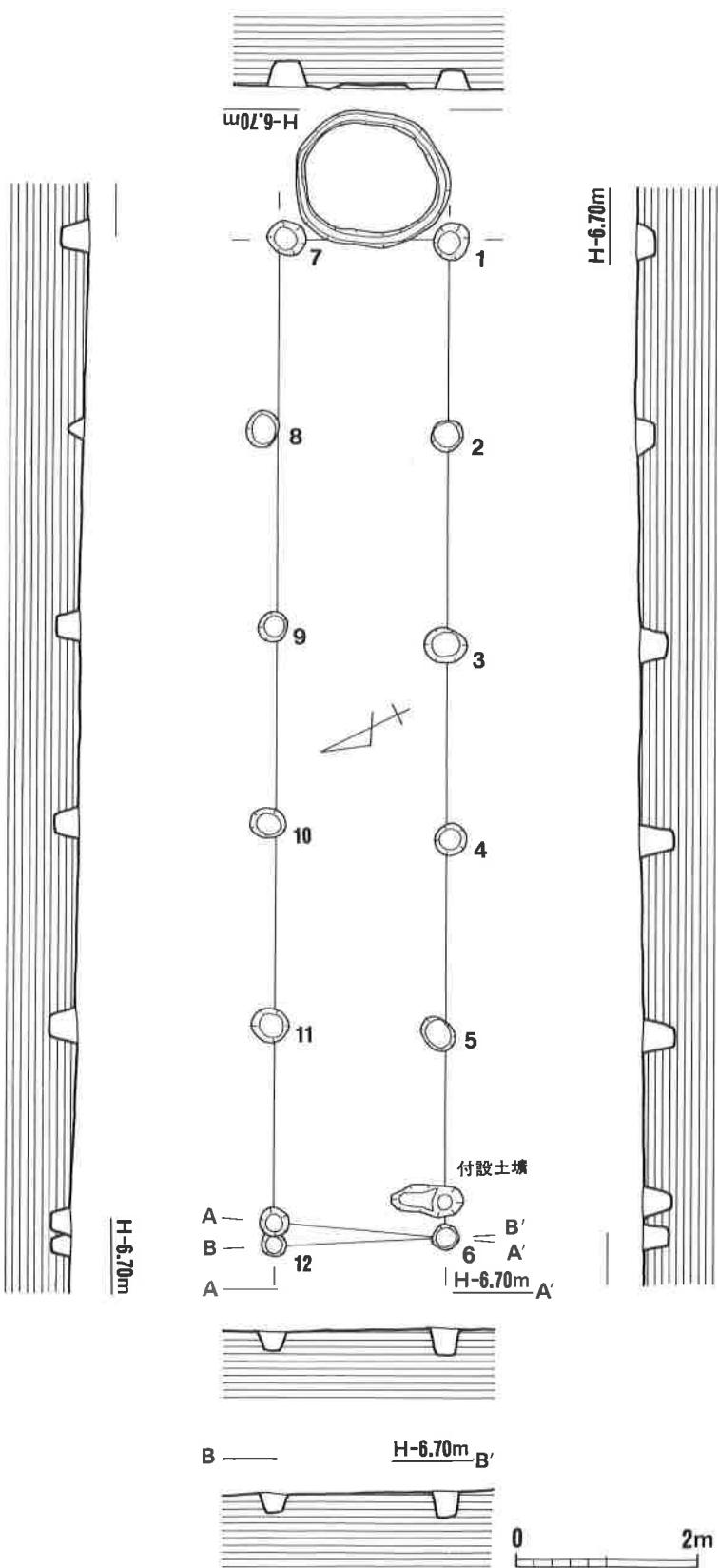
柱穴1, 5, 8, 9, 10には柱の木質が残存しており、他の柱穴と同様に柱を抜き取った痕跡は認められない。付設土壙については後に記す。



第11図 2号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/80)

3号掘立柱建物跡(SB-3)

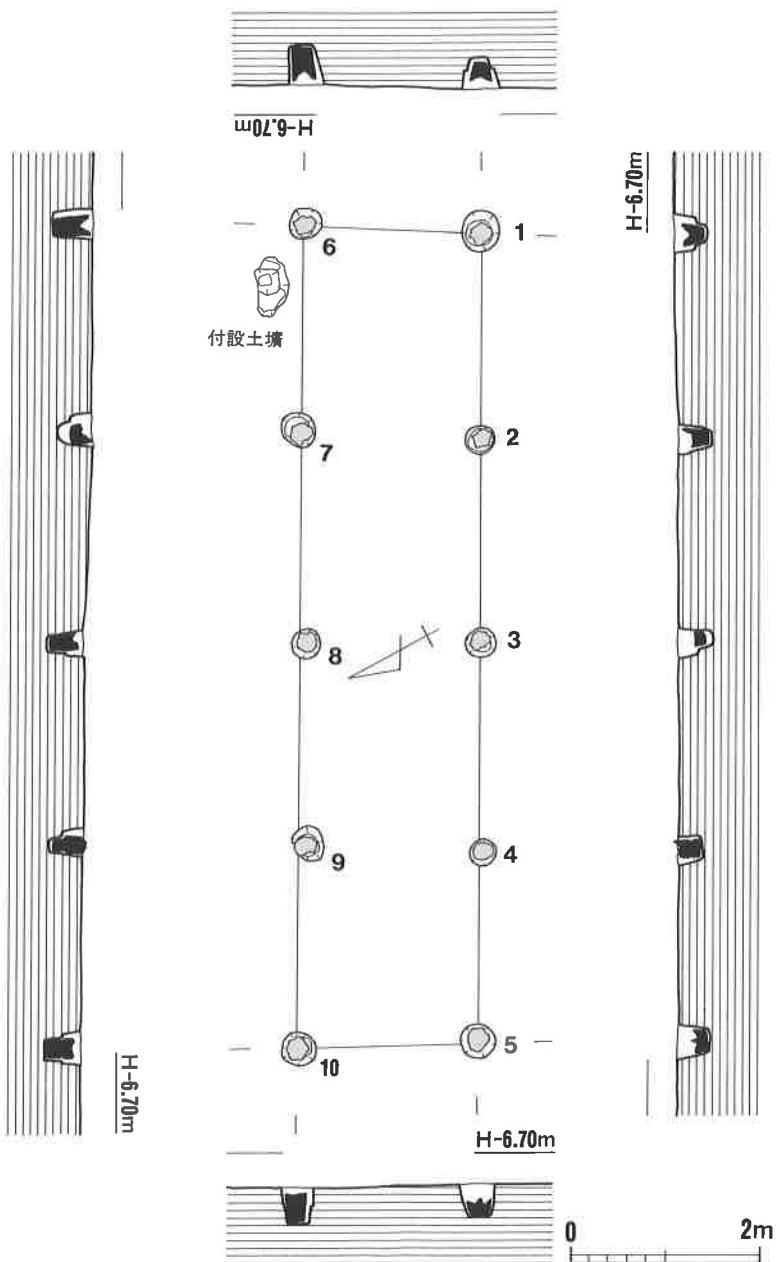
桁行5間、梁行1間の規模をもつ掘立柱建物である。主軸方位はN-55.5°-Wを示し、北側桁行11.12m、南側桁行11.06m、東側梁行1.84m、西側梁行1.88mを測り、柱穴の間隔は、南側桁行柱穴1から柱穴2は2.14m、柱穴2から柱穴3は2.32m、柱穴3から柱穴4は2.16m、柱穴4から柱穴5は2.17m、柱穴5から柱穴6は2.26m、北側桁行は、柱穴7から柱穴8は2.15m、柱穴8から柱穴9は2.17m、柱穴9から柱穴10は2.18m、柱穴10から柱穴11は2.25m、柱穴11から柱穴12は2.19m、梁行は東側から柱穴1から柱穴7は1.84m、柱穴2から柱穴8は2.03m、柱穴3から柱穴9は1.93m、柱穴4から柱穴10は2.20m、柱穴5から柱穴11は1.83m、柱穴6から柱穴12は1.88mを測り、平均すると桁行2.20m、梁行1.95mである。SB-2, SB-3とは柱穴の設置に重なる部分があるが、柱穴自身には切り合い関係がないために新旧関係は明らかではない。また、柱穴には柱を抜き取った痕跡は認められないが、木質の残存率が高い周辺の状況から勘案して、全ての柱穴から木質が検出されないという状況は、柱が抜き取られた結果であると考えられる。



第12図 3号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/80)

4号掘立柱建物跡(SB-4)

桁行4間、梁行1間の規模をもつ掘立柱建物である。主軸方位はN-61.5°-Wを示し、SB-1とほぼ平行関係にある。当初に設定した調査区からは、柱穴1, 6, 7は検出されていなかったが、建物の規模を確定するために確認調査を行なった結果、それらを検出し、調査区を拡張した。また併せて、これ以上東側に建物が延長することができることも確認できた。北側桁行8.72m、南側桁行8.52m、東側梁行1.88m、西側梁行1.93mを測り、柱穴の間隔は、南側桁行柱穴1から柱穴2は2.16m、柱穴2から柱穴3は2.16m、柱穴3から柱穴4は2.24m、柱穴4から柱穴5は2.02m、北側桁行柱穴6から柱穴7は2.20m、柱穴7から柱穴8は2.20m、柱穴8から柱穴9は2.16m、柱穴9から柱穴10は2.15m、梁行は東側から、柱穴1から柱穴6は1.88m、柱穴2から柱穴7は1.93m、柱穴3から柱穴8は1.84m、柱穴4から柱穴9は1.89m、柱穴5から柱穴10は1.93mを測り、平均すると桁行2.16m、梁行1.89mである。全ての柱穴に柱材が残されており、柱穴3、柱穴4に残されていた柱は保存状態が良く、容易に取り上げることができたが、それ以外のものは外面は比較的しっかりとしていたものの、内側が朽ちており取り上げることができなかった。柱材の形態には、様々なバリエーションがある。また、柱穴3、4の柱材は樹種同定の結果、針葉樹であるイヌマキ（マキ科）であることが確認された。（奈良国立文化財研究所光谷拓実氏の分析による。）



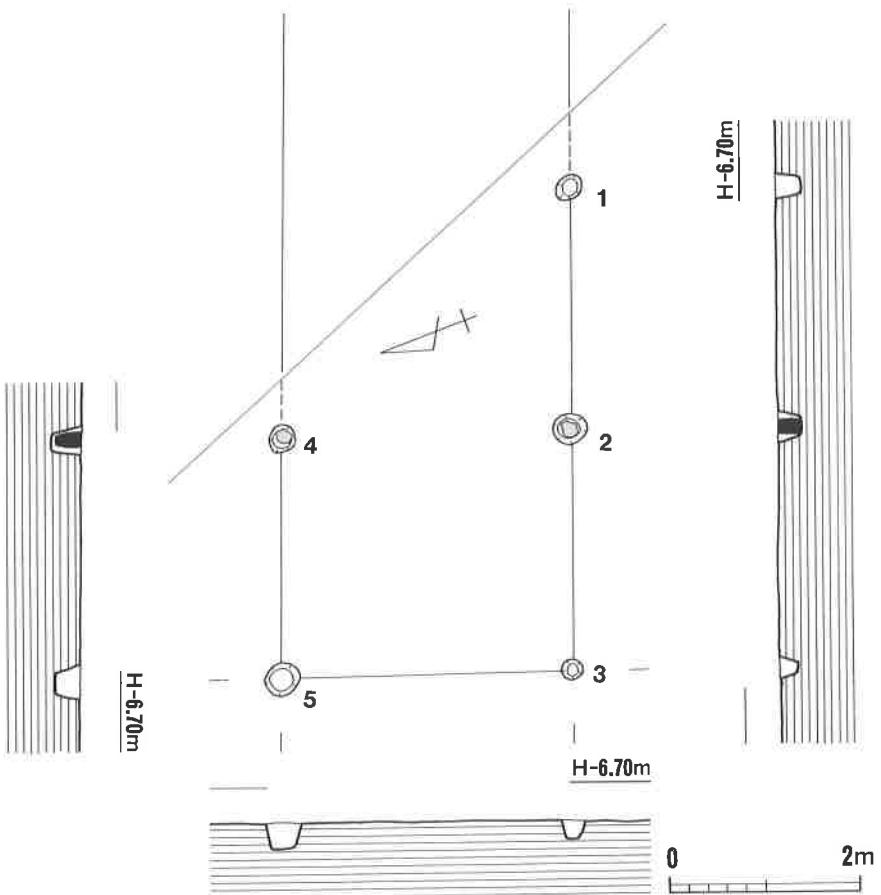
第13図 4号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/80)

5号掘立柱建物跡(SB-5)

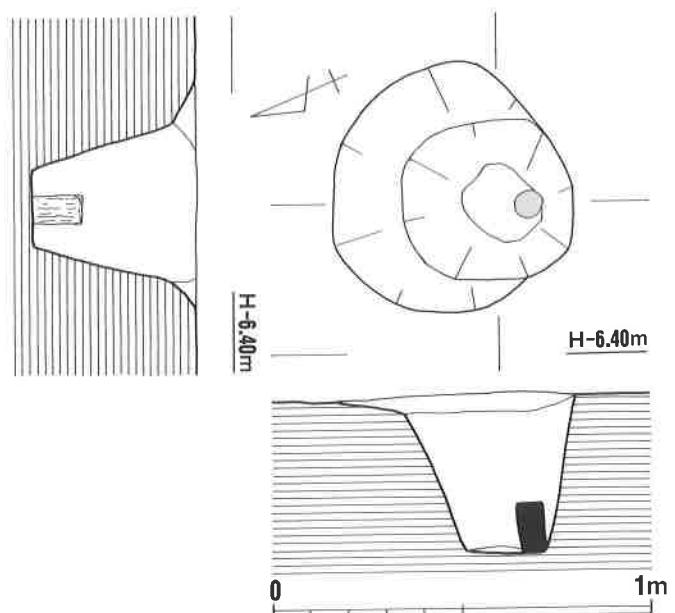
混在する感のあるSB-1, 2, 3, 4からは、やや南側に隔てられた場所に位置する掘立柱建物である。梁行は他の掘立柱建物と同様に1間であるが、桁行方向は調査区外に延長しており全容を確認することができなかった。柱穴の間隔は、南側桁行柱穴1から柱穴2は2.56m、柱穴2から柱穴3は2.56m、北側桁行柱穴4から柱穴5は2.58m、梁行は東側から柱穴2から柱穴4は3.04m、柱穴3から柱穴5は3.12mを測り、平均値は桁行2.57m、梁行3.08mであり、桁行、梁行とともに、この掘立柱建物跡群の中で最も長いものである。柱穴2, 3には柱が残されていた。

掘立柱建物跡付設土壙

1～4号掘立柱建物跡には、建物跡に付随すると考えられる土壙が検出された。その形状は様々であるが、それぞれの建物跡に対する位置関係には共通性があり、高床部への昇降施設の痕跡ではないかと考えられる。類例に乏しく、積極的な根拠を述べるに足らないものの、可能性の一つとして提示したい。なお、これらの土壙については、Ⅲ章において、若干の考察を述べることとする。



第14図 5号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/80)



第15図 2号掘立柱建物跡付設土壙実測図(縮尺1/20)

1号掘立柱建物跡

表2 掘立柱建物跡総括表

建物番号	建物方向	長軸方位	規模 (桁行×梁行)	柱間寸法平均値		床面積 (m ²)	柱穴 番号	形状	規模(cm)			柱材残存の 有無	出土遺物	遺物の時期	備考
				桁行 (m)	梁行 (m)				長径	短径	深さ				
SB-1	ほぼ東西	N-62°-W	6×1	2.22	2.01	26.65	1	楕円形	1.15	0.85	0.50	×	土器片6, 黒曜石片 3	不明	
							2	円形	1.02	0.95	0.61	×	土器片2, 黒曜石片 2	不明	
							3	不整円形	0.78	0.72	0.55	×			
							4	楕円形	1.02	0.69	0.76	×	土器片9, 黒曜石片 2	弥生時代早期	
							5	楕円形	0.92	0.70	0.76	×	土器片4, 黒曜石片2, 炭化物	弥生時代早期?	
							6	不整円形	1.06	0.86	0.68	×	土器片24, 黒曜石片 2	弥生時代早期	
							7	楕円形	1.00	0.71	0.59	×	土器片11, 黒曜石片 1	弥生時代早期	
							8	円形	1.15	1.00	0.50	×	土器片13, 黒曜石塊1, 炭化物	弥生時代早期	
							9	楕円形	1.09	0.73	0.53	×			
							10	楕円形	1.03	0.76	0.51	×	土器片9, 黒曜石片 1	弥生時代早期	
							11	不整円形	0.90	0.79	0.55	×	土器片8, 黒曜石片2, 黒曜石製削器 1	弥生時代早期	
							12	円形	0.75	0.67	0.52	×			
							13	円形	0.78	0.75	0.59	×	土器片8, 黒曜石片 2	弥生時代早期	
							14	楕円形	1.16	0.88	0.52	×	土器片9, 黒曜石片 1	弥生時代早期	

2号掘立柱建物跡

建物番号	建物方向	長軸方位	規模 (桁行×梁行)	柱間寸法平均値		床面積 (m ²)	柱穴 番号	形状	規模(cm)			柱材残存の 有無	出土遺物	遺物の時期	備考
				桁行 (m)	梁行 (m)				長径	短径	深さ				
SB-2	ほぼ東西	N-69°-W	6×1	2.23	1.99	26.6	1	円形	0.37	0.32	0.28	○	土器片1, 黒曜石片 1	不明	
							2	円形	0.30	0.29	0.39	×	土器片 2	不明	
							3	円形	0.40	0.38	0.36	×			
							4	楕円形	0.41	0.36	0.38	×			
							5	円形	0.30	0.27	0.30	○			
							6	楕円形	0.51	0.43	0.36	×			
							7	円形	0.25	0.23	0.25	×	土器片2, 黒曜石片 1	不明	
							8	円形	0.28	0.26	0.36	○			樹種: イヌマキ
							9	円形	0.32	0.30	0.34	○			
							10	円形	0.40	0.38	0.31	○			
							11	円形	0.35	0.32	0.30	×			
							12	楕円形	0.31	0.26	0.37	×			
							13	楕円形	0.29	0.23	0.35	×			
							14	楕円形	0.26	0.23	0.23	×			

3号掘立柱建物跡

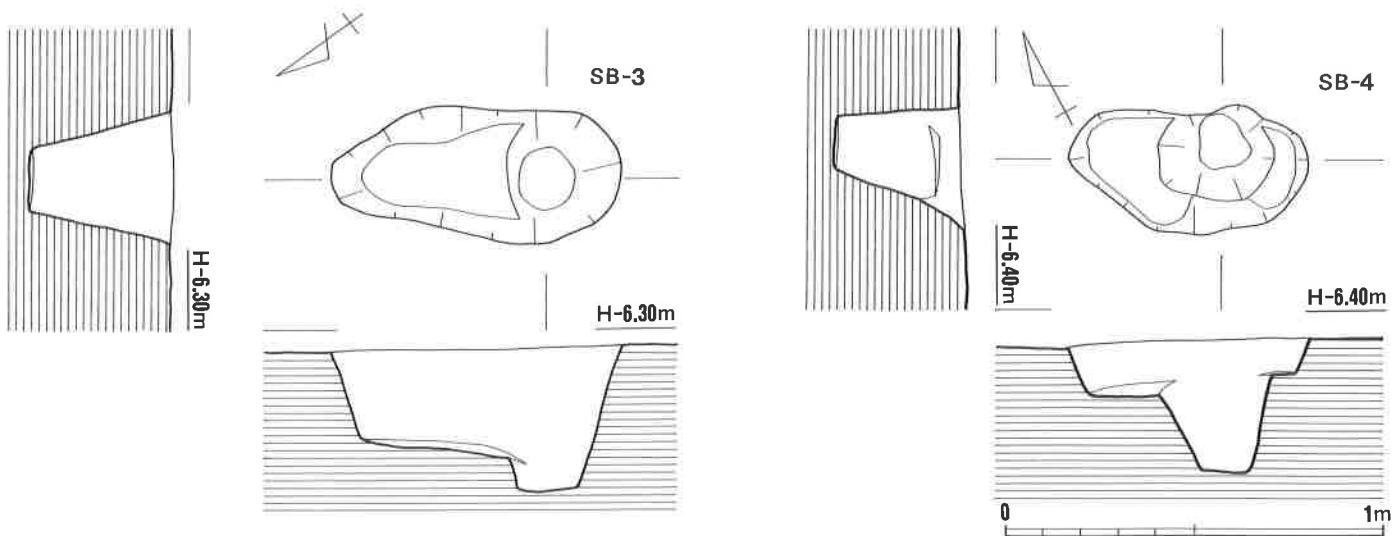
建物番号	建物方向	長軸方位	規模 (桁行×梁行)	柱間寸法平均値		床面積 (m ²)	柱穴 番号	形状	規模(cm)			柱材残存の 有無	出土遺物	遺物の時期	備考	
				桁行 (m)	梁行 (m)				長径	短径	深さ					
SB-3	ほぼ東西	N-55.5°-W	5×1	2.20	1.95	20.81	1	円形	0.42	0.38	0.20	×				
								2	円形	0.37	0.35	0.21	×	土器片1	不明	
								3	楕円形	0.45	0.40	0.30	×			
								4	円形	0.36	0.34	0.38	×	土器片2	不明	
								5	楕円形	0.43	0.34	0.35	×	黒曜石製石匙(未製品?)		
								6	円形	0.28	0.27	0.24	×			
								7	楕円形	0.43	0.38	0.35	×			
								8	楕円形	0.40	0.35	0.32	×	土器片2		
								9	円形	0.33	0.30	0.24	×			
								10	楕円形	0.40	0.35	0.22	×			
								11	楕円形	0.42	0.39	0.31	×	粘板岩1(被熱)	不明	
								12	円形	0.32	0.31	0.22	×			

4号掘立柱建物跡

建物番号	建物方向	長軸方位	規模 (桁行×梁行)	柱間寸法平均値		床面積 (m ²)	柱穴 番号	形状	規模(cm)			柱材残存の 有無	出土遺物	遺物の時期	備考	
				桁行 (m)	梁行 (m)				長径	短径	深さ					
SB-4	ほぼ東西	N-61.5°-W	4×1	2.16	1.89	16.34	1	円形	0.42	0.41	0.44	○				
								2	円形	0.30	0.27	0.38	○			
								3	円形	0.33	0.32	0.37	○			
								4	円形	0.29	0.28	0.42	○	土器片3, 黒曜石片1	弥生時代早期	
								5	円形	0.37	0.34	0.43	○			
								6	楕円形	0.35	0.32	0.36	○			
								7	楕円形	0.38	0.32	0.37	○			
								8	円形	0.30	0.30	0.25	○	土器片1	不明	
								9	楕円形	0.37	0.31	0.41	○			樹種: イヌマキ
								10	円形	0.36	0.34	0.37	○			樹種: イヌマキ

5号掘立柱建物跡

建物番号	建物方向	長軸方位	規模 (桁行×梁行)	柱間寸法平均値		床面積 (m ²)	柱穴 番号	形状	規模(cm)			柱材残存の 有無	出土遺物	遺物の時期	備考	
				桁行 (m)	梁行 (m)				長径	短径	深さ					
SB-5	ほぼ東西	N-69°-W	(2)×1	2.57	3.08	-	1	楕円形	0.28	0.26	0.35	×				
								2	円形	0.34	0.32	0.29	○			
								3	円形	0.23	0.21	0.24	×			
								4	円形	0.30	0.26	0.38	○			
								5	円形	0.38	0.34	0.32	×			



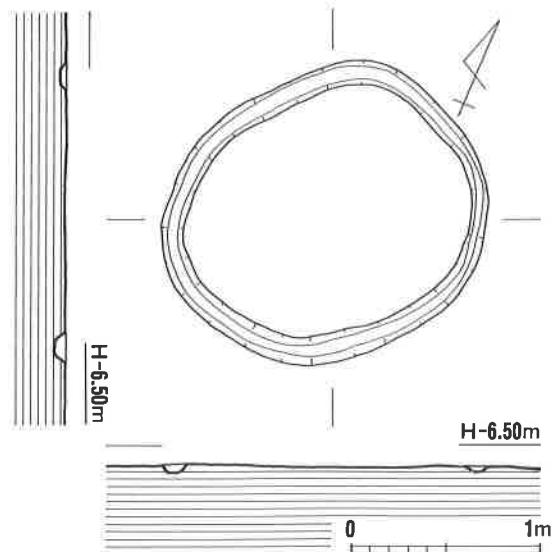
第16図 3, 4号掘立柱建物跡付設土壤実測図(縮尺1/20)

円環溝状遺構 (SX-1)

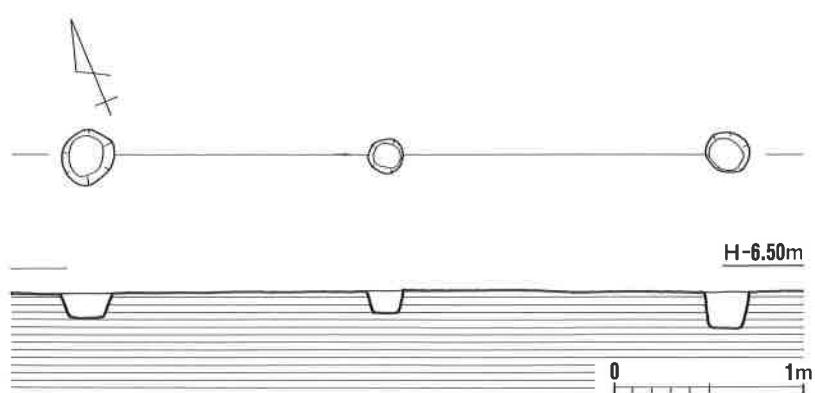
SB-3の東端梁行ラインとその一部が重なる位置にある性格不明遺構である。径150~180cm、幅12cm、深さ5cmの環状の掘り込みであり、建物に伴うものであるかどうかについては明らかではない。埋土に含まれる土器は、肉眼による胎土の観察からは早期のものに間違いないものと思われるが、小片であるために詳細は不明である。

柱穴列

掘立柱建物跡群の北側に位置し、西側に延長するかどうかは確認し得なかったが、少なくとも3基の柱穴が同軸上に並ぶものである。主軸方位は掘立柱建物跡群と近似したN-67°-Wを示し、これらとの何らかの関連性を窺わせ、区画的、或いは防御的な柵や屏などといった役目を担っていたものと推察される。柱穴間隔は、柱穴1から柱穴2は3.56m、柱穴2から柱穴3は3.16mを測る。



第17図 円環溝状遺構実測図(縮尺1/40)



第18図 柱穴列実測図(縮尺1/80)
-20-

3. 弥生時代の遺物

大量の出土をみたⅠ区の縄文時代の遺物とは対称的に、Ⅱ区の掘立柱建物群周辺は遺物量に乏しい。また、出土した土器は包含層を含めても若干の弥生時代中期、中世の白磁を混入する程度であり、殆どが弥生時代早期に位置付けられるものである。1号掘立柱建物の柱穴1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 13, 14、2号掘立柱建物の柱穴1, 2, 7、3号掘立柱建物の柱穴1, 2, 4, 5, 8, 11, 12、4号掘立柱建物の柱穴4, 8からは遺物の出土があったが、大半が小片であるため図示できるものは少ない。

柱穴出土の遺物

1～4は1号掘立柱建物跡の柱穴6からの出土である。

1は浅鉢の口縁部であり、口径は30.2cmに復元される。端部は外側に摘みだされるが、屈曲部の内面には稜は無く、肩部の内面には沈線を有する。器表は内外面ともに黒色を呈し、ヨコ方向に研磨される。

2は口径24.2cmに復元される甕形土器である。口縁部は、上面、内外面ともにナデ仕上げされ、刻みは施されない。外面と口縁部上面にかけて炭化物が付着し、黒色を呈する。

3は甕形土器の口縁部であり、外面やや下方に断面が三角形の凸帯が付され、刻みが施される。刻みは厚みをもつ籠状の工具で上から下に向かって鋭利に施されており、上下方向から見た断面は鋭い角をもち方形を呈する。凸帯の張り付け、刻みの施工は、器面調整の後に施されており、勢い余った工具の先端の痕跡が器面に残されている。外面の器表の色調は黒色を呈する。

4は壺形土器の口縁部であり、内外面ともに丹塗りされ、小片であるので外面は横方向のナデしか確認できないが、内面は横方向に研磨される。

5～7は1号掘立柱建物跡の柱穴7からの出土である。

5は甕形土器の口縁部であり、外面やや下方に凸帯が付され、指の先端で押圧した刻みが施され、刻みの底には爪の跡が残る。器面調整は内外面ともに板状工具による擦過であり、外面には炭化物が付着する。

6は甕形土器の肩部の凸帯部分である。刻みは棒状工具を横方向に押し付けて施されたものと思われる。

7は壺形土器の口縁部であり、外側に強く摘みだされ、内外面ともに丹塗研磨される。

8, 9は1号掘立柱建物跡の柱穴8からの出土である。

8は甕形土器の肩部周辺であり、凸帯部径16.9cmに復元される。頸部から底部へかけての屈曲はなだらかで、口縁部へは僅かに内傾しながら垂直的に立ち上がる。凸帯は丸みをもち、刻みは籠状工具により右から左へと施されている。器面調整は内外面ともに板状工具による擦過を基本とするが、外面の凸帯部以下はナデ仕上げされる。また、外面の凸帯より上の部分には炭化物が付着する。

9は径15.6cmを測る底部である。底面は中央部付近が僅かに窪むものの、平坦に滑らかに仕上げられ、圧痕が残されている。器壁の外面は、叩き状の器面調整が施され、内面には指頭

圧痕による凹凸が多く残される。甕形土器のものと考えられるが、復元すると口径、器高ともに50cmを越える巨大な甕が想定される。その大きさは他に例を知らず、やや躊躇する部分もあるが、二丈町の石崎・矢風遺跡からは時期は下るもの、板付Ⅱ式期の口径60cm、器高60cmを測り、刻目の凸帯をもつ大型の甕形土器が出土しており、大型の壺とともに、大型の甕を用いる習俗が存在していたものと思われる。

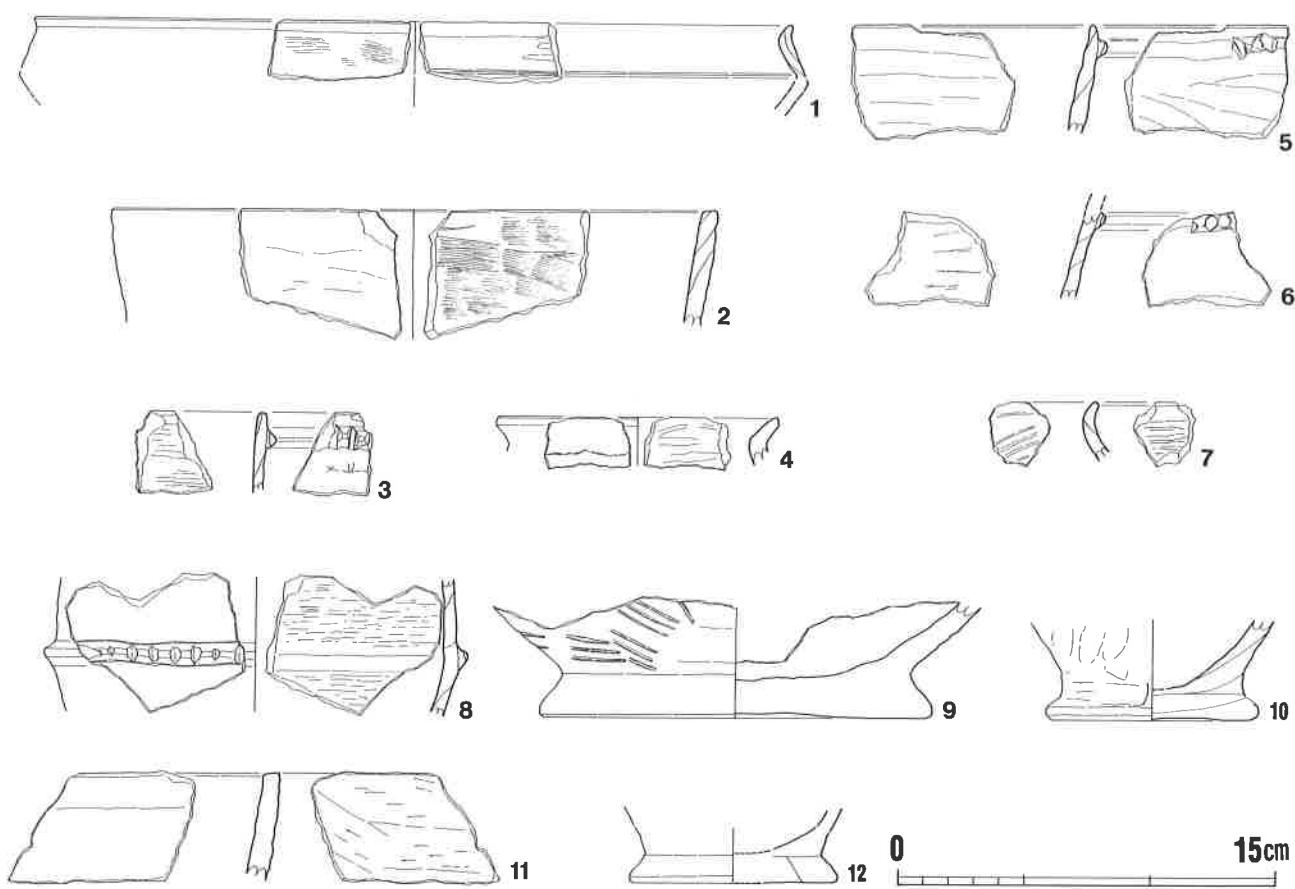
10は1号掘立柱建物跡の柱穴13から出土した甕形土器の底部である。中央部が僅かに窪む平底を呈し、径は8.5cmを測る。内面は不明瞭であるが、外面の器面調整は指による上下方向のナデ、底部と体部の継ぎ目は横方向のナデによる。

11は3号掘立柱建物跡の柱穴8から出土した甕形土器の口縁部である。端部は平坦に仕上げられ、僅かに内傾する。器面調整は板状工具による擦過によって施される。

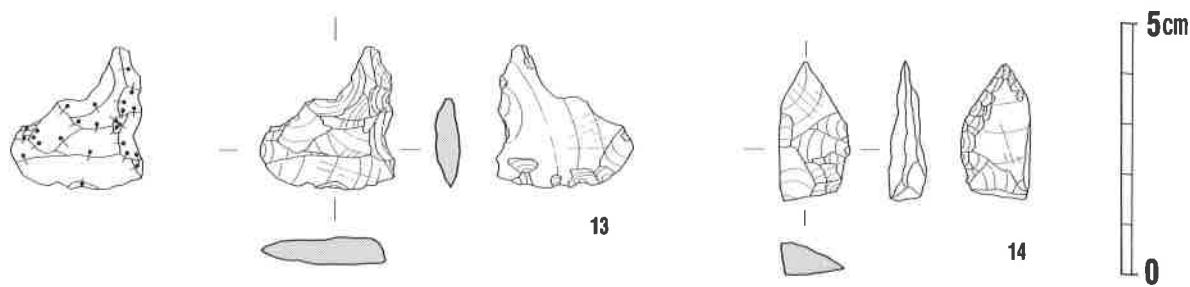
12は4号掘立柱建物跡の柱穴4から出土した甕形土器の底部である。径8.2cmに復元される。

13は3号掘立柱建物跡の柱穴5から出土した石匙の未成品であると思われる黒曜石製の石器である。長さ2.9cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm、重さ3.6gを測る。

14は1号掘立柱建物跡の柱穴11から出土した2次加工のある黒曜石の剥片である。長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.7cm、重さ2.7gを測る。



第19図 柱穴出土土器実測図(縮尺1/3)



第20図 柱穴出土石器実測図(縮尺2/3)

包含層出土の遺物

1は口径27.8cmに復元される肩部に屈曲点をもつ甕である。口縁部外端に凸帯が付され、籠状工具による刻みが施される。内面は黒色を呈し、口縁部内端には炭化物が付着する。外面には板状工具による横方向の擦過痕が残り、内面は粗い条痕のあとをヨコナデされる。

2は口縁部外端と肩部の屈曲点に2条の刻目凸帯を有する甕である。口径は23.4cmに復元される。内面は黒色を呈し横方向の研磨が施され、外面の肩部より上位も黒色を呈するが、外面のものは使用段階で炭素が吸着したものであろう。胎土には小砂粒を多く含む。

3は2と復元口径、胎土、黒色化する部分などにおいて類似する箇所が多く、同一個体である可能性もあるが、凸帯や刻目の形状などがやや異なっており、別個体として掲載した。

4は口径25.2cmに復元される甕であり、口縁部外端に刻目をもつ凸帯が付される。色調は内外面ともに淡燈褐色を呈し、中期のものに近い質感である。

5は口径20.2cmに復元されるもので、肩部の屈曲点に刻目をもつ凸帯が付されるが、口縁部の刻目部分は口縁部内端から粘土紐を張り付けたものであり、いわゆる刻目凸帯ではない。胎土には小砂粒を多く含み粗製ではあるが、高杯である可能性も考えられる。

6は甕の口縁部であり、口縁部外端の下寄りの位置に刻目を有する凸帯が付される。胎土には多量の小砂粒と、燈色の小粒が含まれ、器面の色調は燈褐色を呈する。

7は燈褐色を呈し、胎土には少量の小砂粒が含まれる。凸帯は太く丸みをもち、口縁部外端の下寄りの位置に付される。

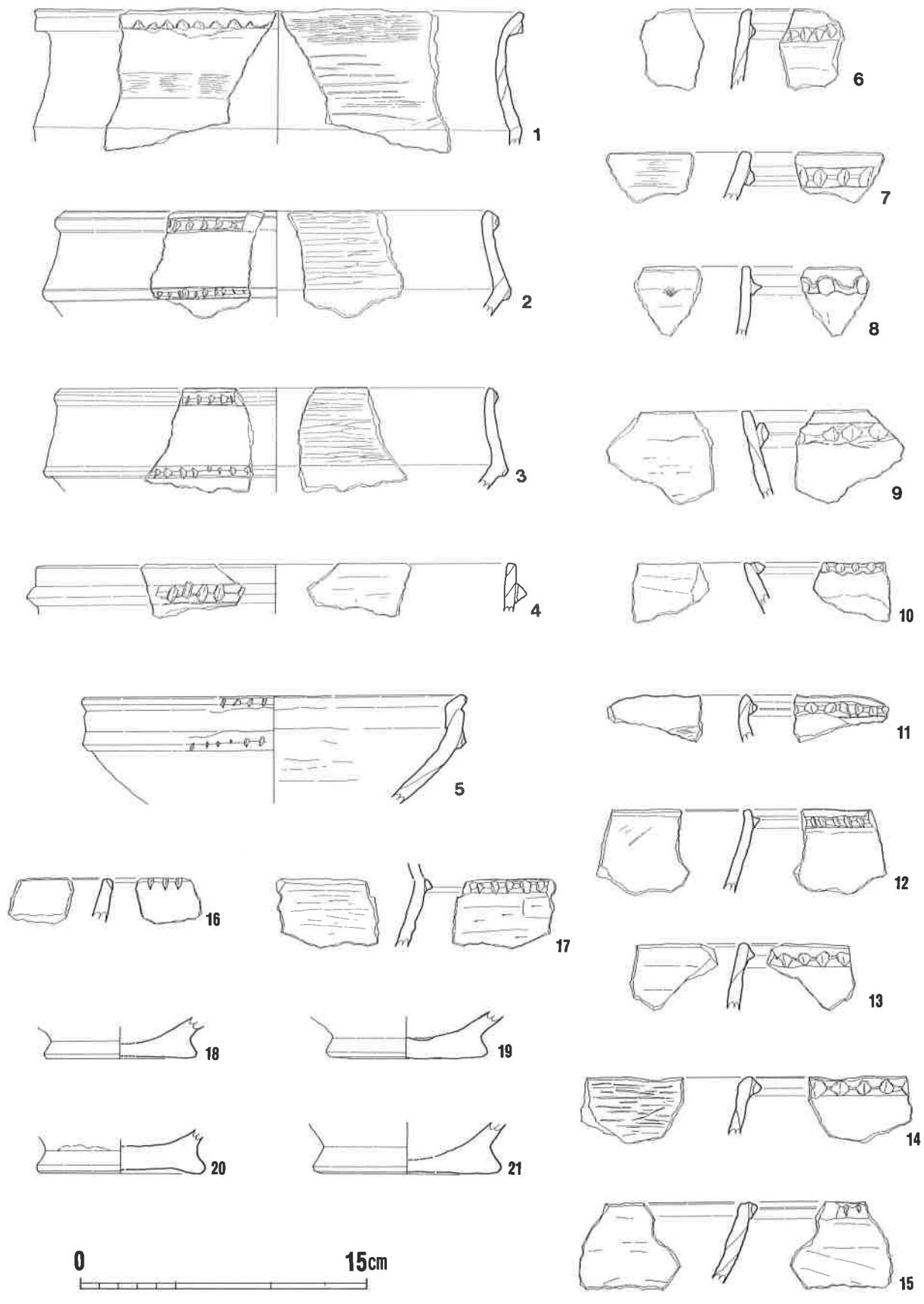
8はやや異質な凸帯をもつ甕であり、刻目を意識したものであるが刻目ではなく、薄く伸ばした粘土紐を上下方向に湾曲させて整形しながら張り付けたものである。内面は黒色を呈し、横、または斜め方向にナデて器面調整される。胎土には小砂粒を多く含む。

9は口縁部外端の下寄りに刻目凸帯が付される甕である。凸帯は大きく偏平であり、刻目を施しながら張り付けられたものである。内面には強いヨコナデによる粗い器面調整が施される。

10は口縁部外端に接して刻目の凸帯が付される甕である。凸帯は細く鋭い断面三角形を呈し、籠状工具により刻目が施される。色調は淡燈褐色を呈し、胎土には少量の小砂粒を含む。

11は口縁部外端のやや下寄りに凸帯が付される甕である。内面は黒色を呈し、炭化物が付着する。凸帯は細く、断面は台形状を呈し、刻目は籠状工具により施される。

12は口縁部外端のやや下寄りに刻目凸帯が付される甕である。内外面ともに炭素が付着し、内面には炭化物が付着する。凸帯は細く偏平であり、刻目は先端の鋭い籠状工具により施される。また、凸帯の下部の接合面を棒状工具により整形した痕跡が認められる。



第21図 包含層出土土器実測図-1(縮尺1/3)

13は口縁部外端のやや下寄りに刻目凸帯が付される甕である。凸帯は細く低い断面三角形状を呈し、刻目は先端の鈍い棒状工具による刺突によって施される。器表の色調は暗褐色を呈し、外面は不明瞭であるが、内面には横方向の板ナデの痕跡が認められる。

14は口縁部外端に接して刻目凸帯が付される甕であり、口縁部外端と凸帯の上端は連続的な傾斜をなす。凸帯は細く断面は先端の鈍い三角形状を呈し、刻目は指頭による押圧と爪による削り取りによって成されるものと思われる。内面は板状工具による粗いナデによって器面調整される。器表の色調は外面は黄褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含む。

15は肩部に刻目凸帯が付される甕である。凸帯は細く偏平な三角形状を呈し、刻目は先端の鈍い箆状工具による押圧によって施される。また、外面のみに炭素が付着する。器面調整は、内外面ともに板状工具による横方向のナデによる。

16は刻目が口縁部外端に直接刻まれる甕であり、刻目は先端の鋭い箆状工具により施される。器表の色調は、内面は淡燈褐色、外面は炭素が全体に付着し黒色を呈する。胎土には小砂粒を少量含む。

17は肩部に刻目凸帯が付される甕である。凸帯は細く偏平で、断面は先端の鋭い三角形状を呈し、刻目は箆状工具により施される。外面のみに炭素が付着し、器面調整は横方向の粗いナデによる。

18～21は甕の底部である。

18は底径8.0cmに復元され平底を呈し、器表内面には炭素が付着する。胎土は小砂粒を多く含み粗いものである。

19は底径8.5cmを測る平底を呈し、器表内面は剥離が著しいが炭素の付着はなく、白色を呈する付着物がみられる。胎土は微小砂粒を多く含むが精練されたものであろう。

20は底径8.8cmに復元され、底面はあげ底状を呈し丁寧にナデ仕上げされる。内面には炭素が付着し、胎土は微小砂粒を含むものの精練されたものである。

21は底径10.0cmに復元される平底である。器表内面には炭素が付着し、胎土には小砂粒を多く含む。

22は口径11.0cmに復元される壺である。外面には赤色顔料が塗布され、内外面ともに横方向に研磨が施される。胎土は精練されており、焼成は硬質である。

23は口径17.6cmに復元される高杯である。内外面ともに黒色を呈し、内面には横方向の研磨が施される。口縁部は外側に段を有し、板状工具、或いは貝殻による擦過が認められる。肩部の屈曲点を境にして胎土に違いがあり、上部は数mm程度の砂粒を僅かに含むものの精練されており、下部も精練はされているものの微小砂粒を多く含む。

24は口径20.2cmに復元される浅鉢である。内外面ともに黒色を呈し、器表の質感は非常に滑らかな精製品である。器面調整は内外面ともに横方向の研磨が施され、胎土は微小砂粒をも殆ど含まない。

25は口径18.2cmに復元される浅鉢であり、浅鉢としては粗製品である。器表は内外面ともに黒色を呈する部分があるが、意識的なものではなく2次的に炭素が付着したものであろう。胎土は微小砂粒を少量含む程度に精練されている。

26は口径31.2cmに復元される浅鉢である。胎土は精練されており、不純物を殆ど含まない。

器表内面は黒色を呈し研磨が施されるが、外面は僅かに燈色味を帶びた白褐色を呈し、横方向のナデによって器面調整される。

27は口径17.2cmに復元される椀である。内外面ともに赤色顔料が塗布され、内面は横方向、外面は斜め方向の研磨が施される。胎土は精練される。

28は椀の口縁部である。内外面ともに赤色顔料が塗布され、横方向を基本として研磨が施される。胎土は精練され、焼成は硬質である。

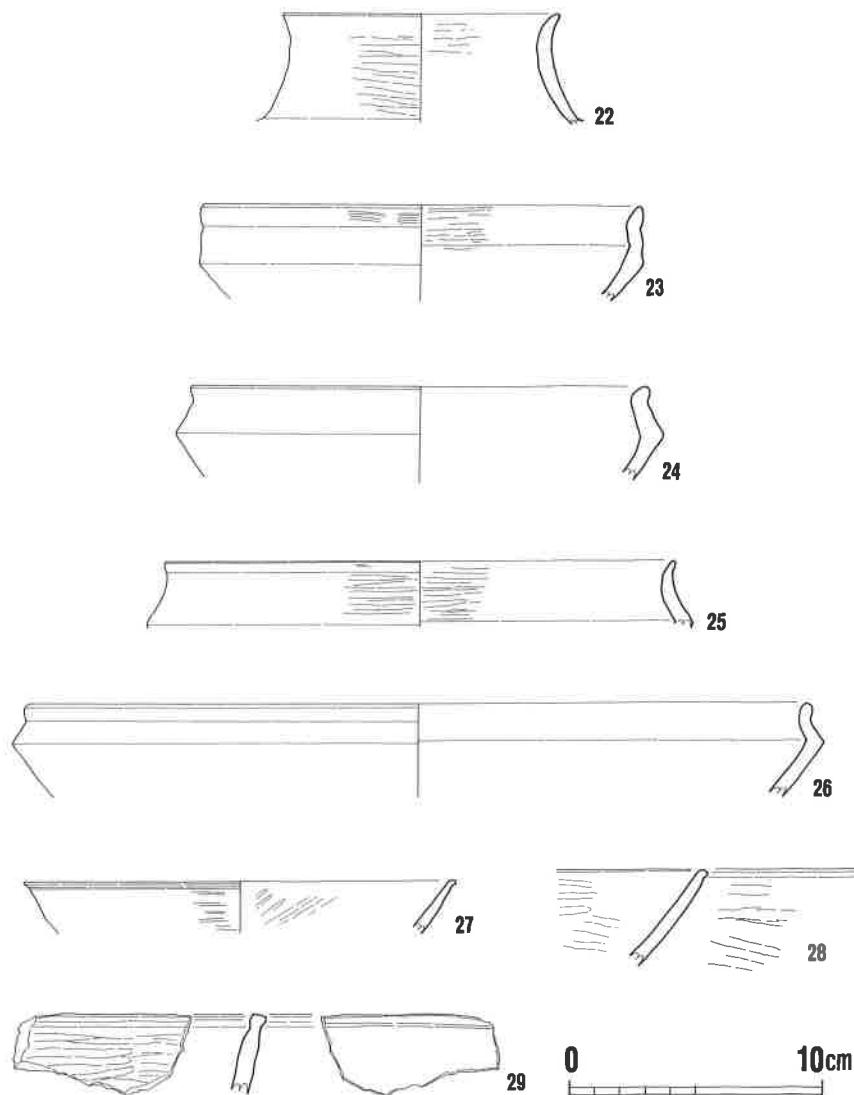
29は鉢の口縁部である。口縁部外端は外に摘み出され、内縁部には沈線が巡る。また、器表内面には横方向の研磨が施され、胎土には小砂粒をやや多く含み、器表の色調は内外面ともに暗褐色を呈する。

30は磨製石鏃の切先部である。残存長2.5cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gを測る。全体的に摩耗しており、鎬稜も鈍い。両面の右側刃部にのみ研磨による擦痕を残す。

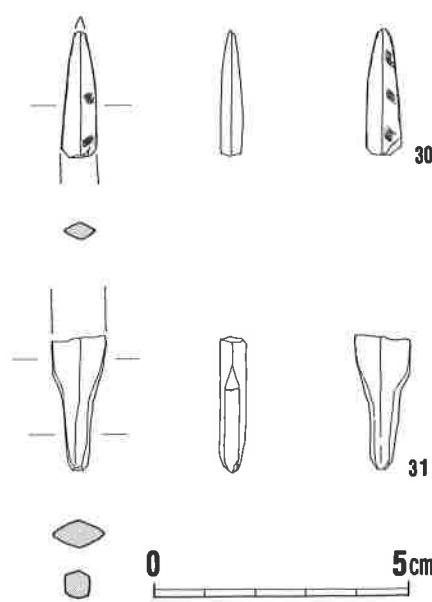
31は磨製石鏃の基部である。残存長2.7cm、最大幅1.1cm、重さ1.7gを測り、身部の断面形は菱形、茎部は六角形状を呈する。

柱材

1は2号掘立柱建物跡の柱穴8に残されていた柱材である。残存高25.5cm、最大径11.5cmを測る。樹種はイヌマキ（マキ科、針葉樹）であり、原木の外周部分を加工して使用している。加工によるはつり面は長さ20cm以上の縦長を呈し、幅2.5~3.5cmのものが多く、幅4cm前後の工具によるものであると考えられる。また、一枚の剥離面の中には複数回の打痕が残され、垂



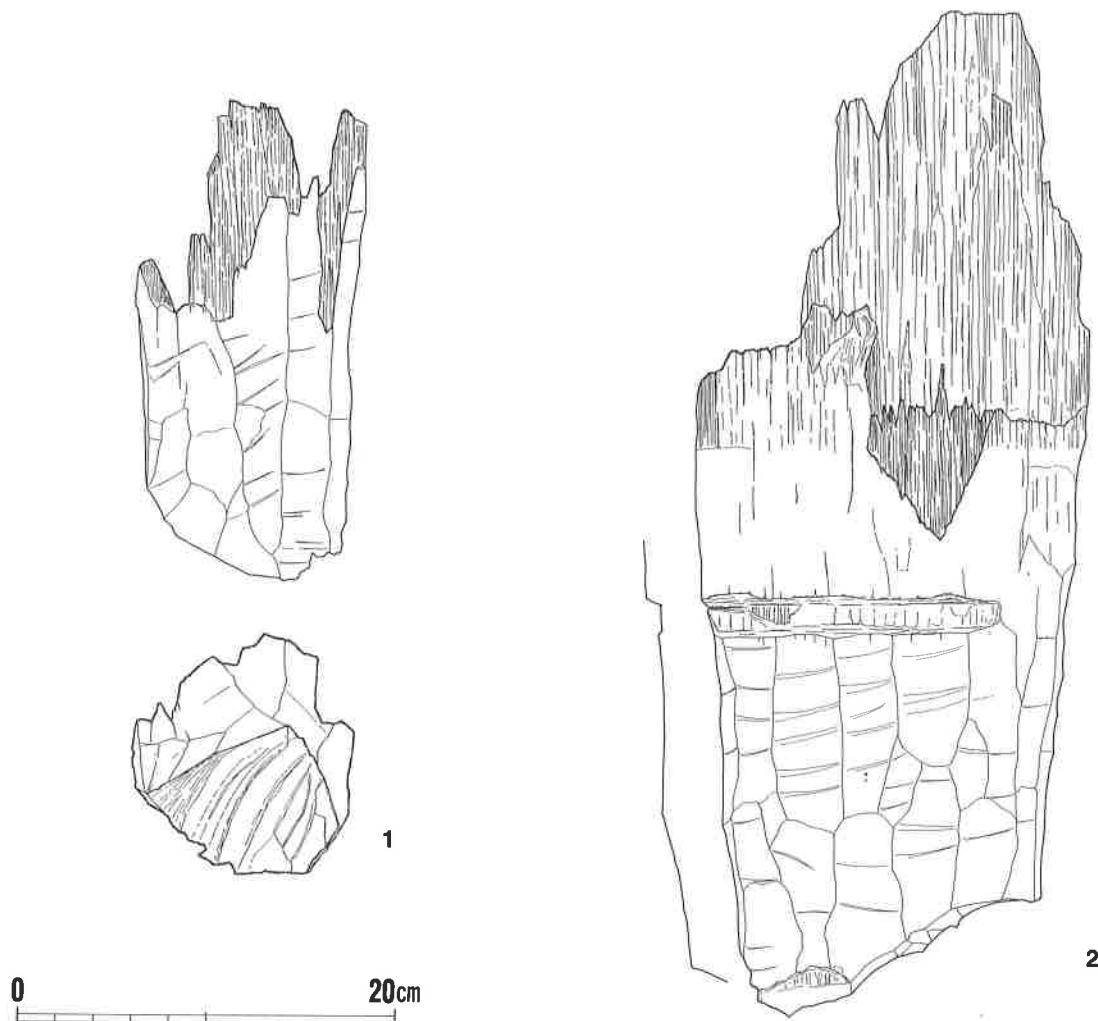
第22図 包含層出土土器実測図－2(縮尺1/3)



第23図 包含層出土石器実測図(縮尺2/3)

直方向に対して左斜め上からのが大半を占める。底面は斜めに切斷され、切斷面は鑿、或いは 状の工具により粗く整形される。

2は4号掘立柱建物跡の柱穴9に残っていた柱材であり、1と同様にイヌマキ材が用いられる。残存高54.2cm、最大径20.6cmを測るが、年輪の中心が著しく偏った位置にあり、少なくとも径50cm以上の木材を加工して使用している。また、加工痕が下半部と底面の一部に残され、下から約20cm前後の部位には外周の3分の2程度を巡る抉りが入る。この抉りは、上端と下端にそれぞれ横方向に溝状の切り込みを入れ、その間を年輪の層に従って剥ぎ取るという手法が用いられているものと考えられ、縦方向の工具痕は殆どみられない。下半部の加工痕は、上から下への打ち込みによって成されており、縦長のはつり痕が残されている。これはつりは一回の打ち込みによって成されたものではなく、一ヶ所のはつり面の中には数回以上の打ち込みの痕跡が残されている。これらの工具痕からその加工に用いられた工具は幅3～4cm程度の刃渡りをもつものであると考えられる。また底面の加工によるものである。



第24図 柱穴出土柱材実測図(縮尺1/4)

III. おわりに

1. 掘立柱建物跡について

検出された5棟の掘立柱建物の構造は桁数には若干のバリエーションがあるものの、梁数は全て1間であることが特徴的であり、その内訳は、 6×1 間のものが2棟（1号掘立柱建物跡、2号掘立柱建物跡）、 5×1 間のものが1棟（3号掘立柱建物跡）、 4×1 間のものが1棟（4号掘立柱建物跡）のほか、全容を明らかにすることができなかつたが $2 \times 1 + \alpha$ 間のものが1棟（5号掘立柱建物跡）である。少なくとも、このうちの1号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡については、柱痕、或いは柱材の規模から勘案して高床式の構造をもっていたものと考えられる。

掘立柱建物跡の時期は、掘立柱建物という遺構の性格上、出土した遺物によってその時期が確定でき得るものではないが、柱穴埋土中に含まれる土器は例外なく弥生時代早期に該当する夜臼式単純期以前のものであり、包含層から出土した遺物もこれらと同時期、或いはそれ以前のものが絶対的多数を占め、極めて少量の弥生時代中期の土器片、中世の白磁片が含まれるのみであり、これらの掘立柱建物跡が弥生時代早期（縄文時代晚期後半）に位置づけられるものであることは間違いないものと考える。

掘立柱建物跡群中の前後関係については遺物による判断は困難であるが、1号掘立柱建物跡の柱穴8から出土した甕の底部は、柱穴出土土器群の中では最も古相の形態を有していると言えるであろう。また、1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡、2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡、3号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡の間には遺構そのものの切り合い関係はないものの、柱穴の配置に重複する部分、或いは近接しすぎて同時期に存在したとは考えにくい状況が認められ、このことから、少なくとも2つの時期に分けることが可能である。また、1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡とは 6×1 間という桁行、梁行の柱間の数のみならず、柱の間隔、想定される床面積などにおいて、他の掘立柱建物跡とは一線を画す類似性を有しており、2号掘立柱建物跡の柱穴には柱材が遺存するものの、1号掘立柱建物跡には全くみられないことから、建築部材を抜き取っての隣接地への移築が想定される。この場合、2号掘立柱建物跡の柱穴に残されていた柱材は1号掘立柱建物跡の柱痕と比較すると著しくその規模が小さいので、細身に再加工して利用されたものと考えられる。

建物の機能については、建物跡群周辺における遺物量の少なさと残存率の悪さなどから感じ取られる生活感の稀薄さ、周辺の試掘調査における竪穴住居の存在が確認されていないという状況などから、これらの建物跡群が一般的な居住空間からはある程度隔離された領域に建築されたものであると考えられ、検出された5棟の建物跡のうちの4棟がいずれかと重なり合う位置にあるという状況は、定められた領域内での建て替えを余儀なくされた結果であると思われる。また、1号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡、2号掘立柱建物跡と5号掘立柱建物跡は、それぞれが近似した長軸方向を有しており、これらを同時期に存在したものと考えればその建物の配置については、何らかの規格性が介在していたものであると考えられ、これらと平行する位置にあり、柵、或いは塀といった防御性と同時に区画性を意識させる柱穴列の存在は、こ

これらの掘立柱建物跡群の立地する環境が一般的でない空間であったことを傍証するものであり、唯一出土した大陸系の磨製石器が農具ではなく、武器であるという点も興味深い。さらに、住居とは考えがたい桁行4～6間×梁行1間という細長の平面形、高床式が想定される建物の存在などからは、これらの掘立柱建物跡が貯蔵施設、或いは祭祇施設などといった特殊な機能を有していたものであろうことが推察される。

また、5号掘立柱建物跡を除く全ての掘立柱建物跡には、高床部への昇降施設を据えた痕跡と思われる土壙（建物跡付設土壙）が検出されている。これらについては、それぞれの形状は異なってはいるものの、全て掘立柱建物跡の最も端部にある桁行間に近い位置にあるという共通性を有する。1号掘立柱建物跡付設土壙は、柱穴6と柱穴7との桁行間のやや外側に位置し、長径93cm、短径76cm、深さ10cmの不整橢円形を呈する。浅く広い範囲の痕跡であり、仮設的な、幅の広い組み合わせ式の梯子的なものが想定され、入口は建物の側面に想定される。2号掘立柱建物跡付設土壙は、柱穴6と柱穴7との桁行間の内側に位置し、この為、建物内部への入口は高床部の床面に想定され、土壙には柱状の木質が残存しており、円柱状の木材に切り込みを入れた常設的なものであったと思われる。3号掘立柱建物跡付設土壙は、柱穴5と柱穴6の桁行間に位置し、桁行方向に長軸をもつ長円形を呈し、2号掘立柱建物跡のものと同様に、高床部の床面への常設的な昇降施設であると思われる。4号掘立柱建物跡付設土壙は、柱穴6と柱穴7の桁行間のやや外側に位置し、昇降施設の構造は2、3号のものと同様で常設的なものであると思われるが、建物の側面に入口が想定される。また、土壙の長軸が桁行方向を向いており、昇降施設は柱穴7の方向へ傾けられていたものであろう。なお、これらの土壙群の存在意義については調査時点においては認識しておらず、報告書の作成段階において初めて気が付いたものである。その為、遺構の検出、掘り下げ段階においては問題意識を欠如しており、見落としてしまった事象も少なからずあると思われる。これらが高床部への昇降施設であることの是非は、今後の問題意識をもった類似する遺構の調査によって解決されるものと思われる。また1号掘立柱建物跡については、4号掘立柱建物跡と比較すると同規模の太さの柱材が用いられながらも柱穴が著しく大きいという顕著な特徴をもつ。この相違点を柱材の長さの違いに起因するものと考えるならば、そのさらなる特殊性を示す可能性もあるであろう。

2. 柱材の形態について

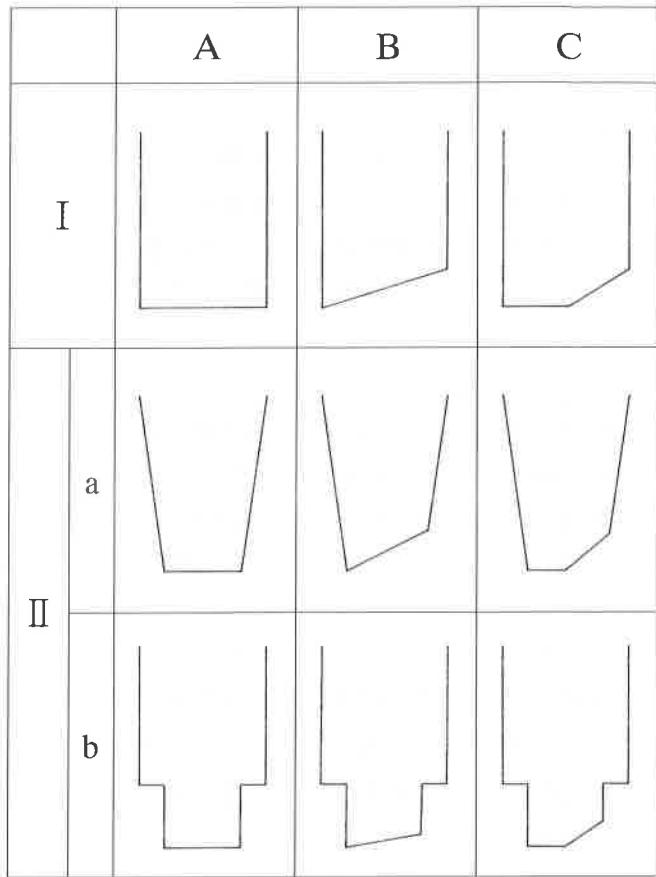
4号掘立柱建物跡には比較的良好な状況で柱穴に柱材が残されており、柱穴を半割することにより、普段はあまり目にする機会のない柱の基底部の様子を観察することができ、その形態には意外にも様々なバリエーションがある事が確認された。以下にその形態分類を試みる。

まず、垂直方向の断面形については、上部と下部の径が等しいもの（I類）と、異なるもの（II類）とに分類され、II類については上部から下部にかけて斜めに削り取られた結果連続的な面をもって先細り状を呈するもの（IIa類）、上部の整形後に段状を呈して下部が細く削り取られるもの（IIb類）に細分される。さらに、底面の形状については、水平にカットされるもの（A類）、斜めにカットされるもの（B類）、その両者が混在するもの（C類）の3種類がある。また、水平方向に帯状の抉りが入るもの（有抉式）もある。以上の分類に依れば、柱穴1はI

—B類、柱穴2は不明、柱穴3はII-a-B類(有抉式)、柱穴4はIIb-C類、柱穴5はIIb-A類(有抉式)、柱穴6はIIa-A類、柱穴7は不明、柱穴8はI-A類(有抉式)、柱穴9は不明、柱穴10はIIa-A類(有抉式)に該当し、2号掘立柱建物跡の柱穴8のものはI-B類に該当する。これらの形態の違いには、機能的な要因のみによって説明することは困難であり、恐らく作業者の癖、趣向、偶然性が混在して内包されているものと思われるが、IIb類については上部構造の重圧によって柱材が極度に沈みこむのを防ぐ基礎的な機能をもっていたものと考えられる。抉りについては、材木の運搬に供したものであると思われ、上端につける場合と、下端につける場合の両者があったものと考えられる。樹種については、2号掘立柱建物跡の柱穴8と、4号掘立柱建物跡の柱穴9、10に残されていた柱材についてのみ奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に同定をお願いした。その結果は本文中にも触れているが、全てイヌマキであることが確認された。イヌマキはマキ科の常緑針葉高木であり、関東南部以西の本州、四国、九州、沖縄、台湾、中国などに広く分布し、高さ25m、直徑2mにまで成長する。また、白蟻の害を受けないことから、暖地の建築材としての利用に適するものとされている。

3. おわりに

以上、上深江・小西遺跡における弥生時代に遺構と遺物についての説明を述べた。別の発掘調査を終えると同時に、この遺跡の試掘調査に入り、そのまま本調査に突入するという慌ただしく先行きの見えない状況の中で始まった調査であったが、無事に調査を終えることができた。しかしながらこの遺跡については残された課題は多大であり、縄文期についての報告も未だ行っていない。またこの地は、食糧収奪社会から食糧生産社会への連続的な変遷をたどり得る可能性の高い希少な地域でもあり、今後の調査には高い問題意識が必要とされるであろう。なお、報告書作成に至るまでは、橋口達也氏、中間研志氏(福岡県教育委員会)、山崎純男氏、山口讓治氏(福岡市教育委員会)、光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所)、岡部裕俊氏(前原市教育委員会)を始めとする多くの方々のご協力を得た。末筆ながら謝意を表する次第である。

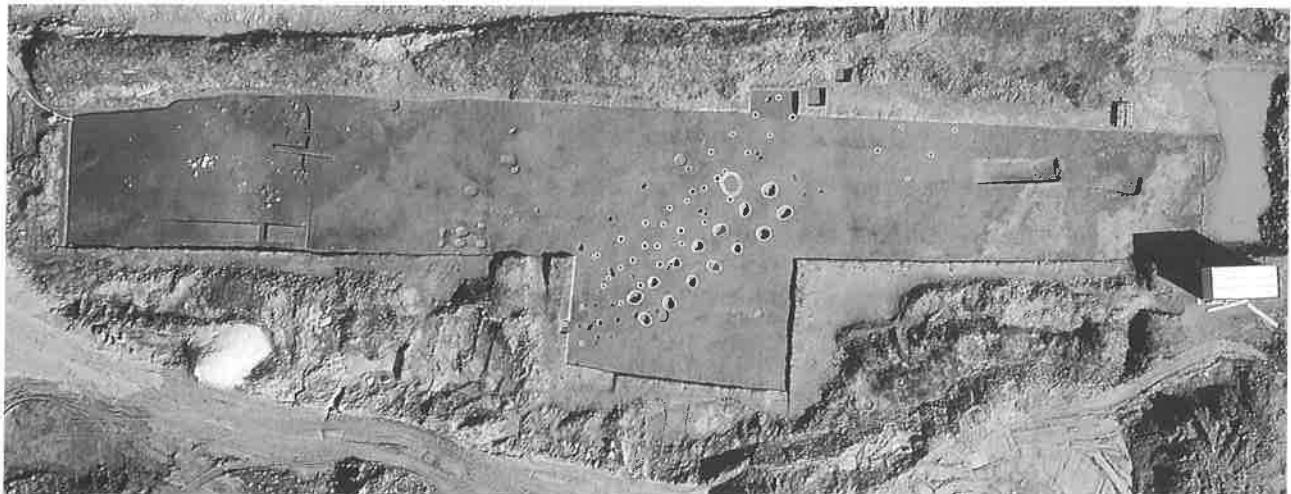


第25図 柱材形態分類図

図 版



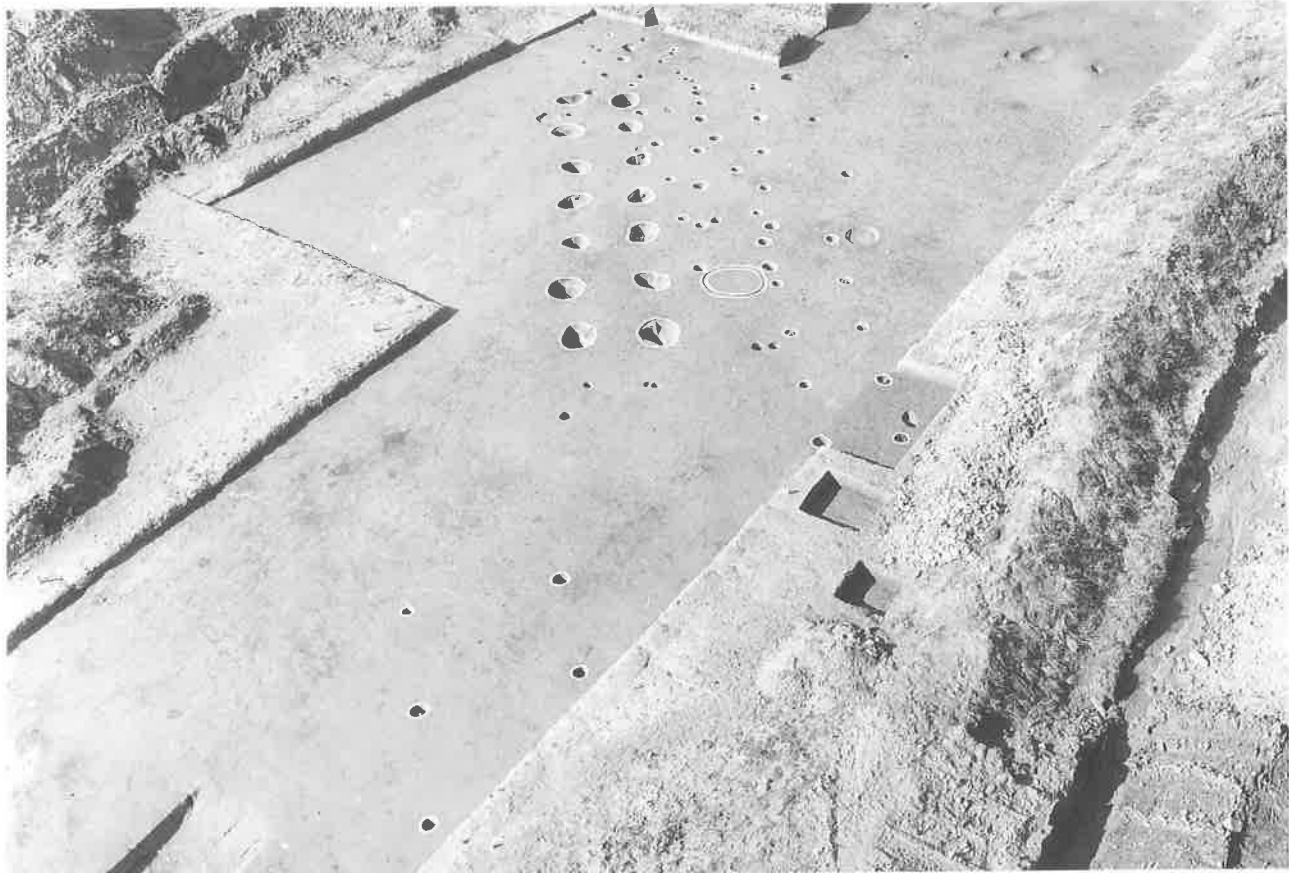
調査区上空から唐津湾を望む（空中写真）



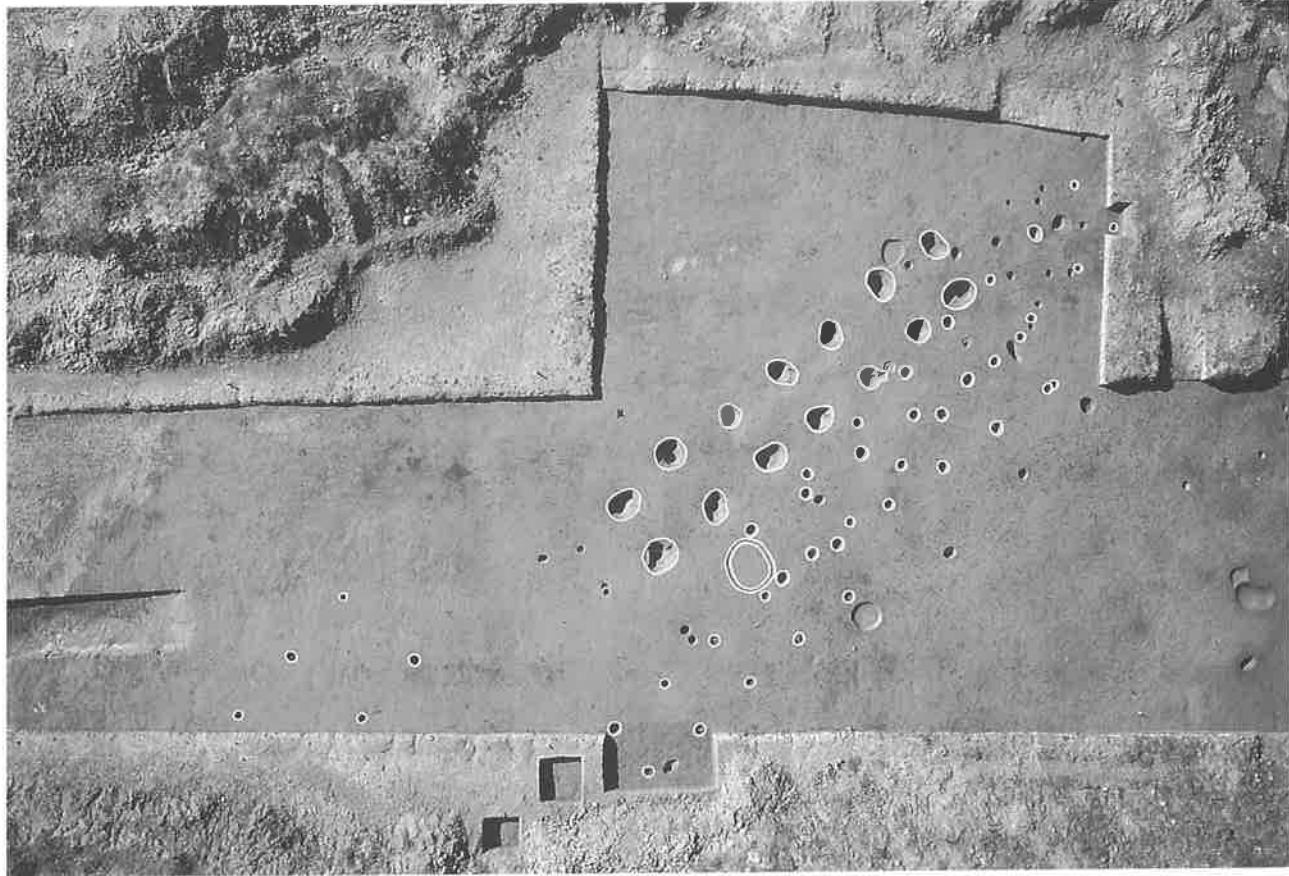
a. II区全景（空中写真）



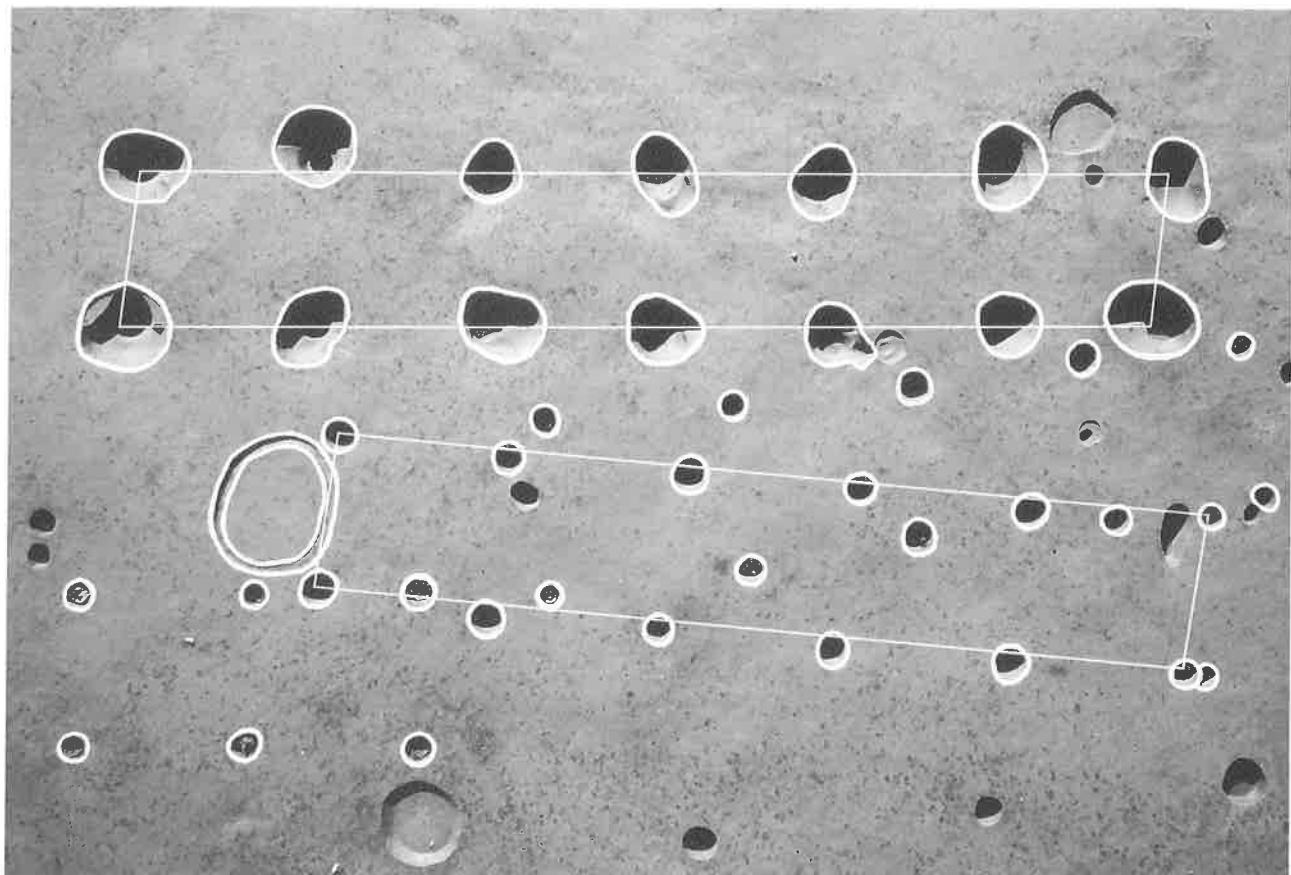
b. II区南西側上空から見た一貴山・深江平野（矢印は石崎・曲り田遺跡）



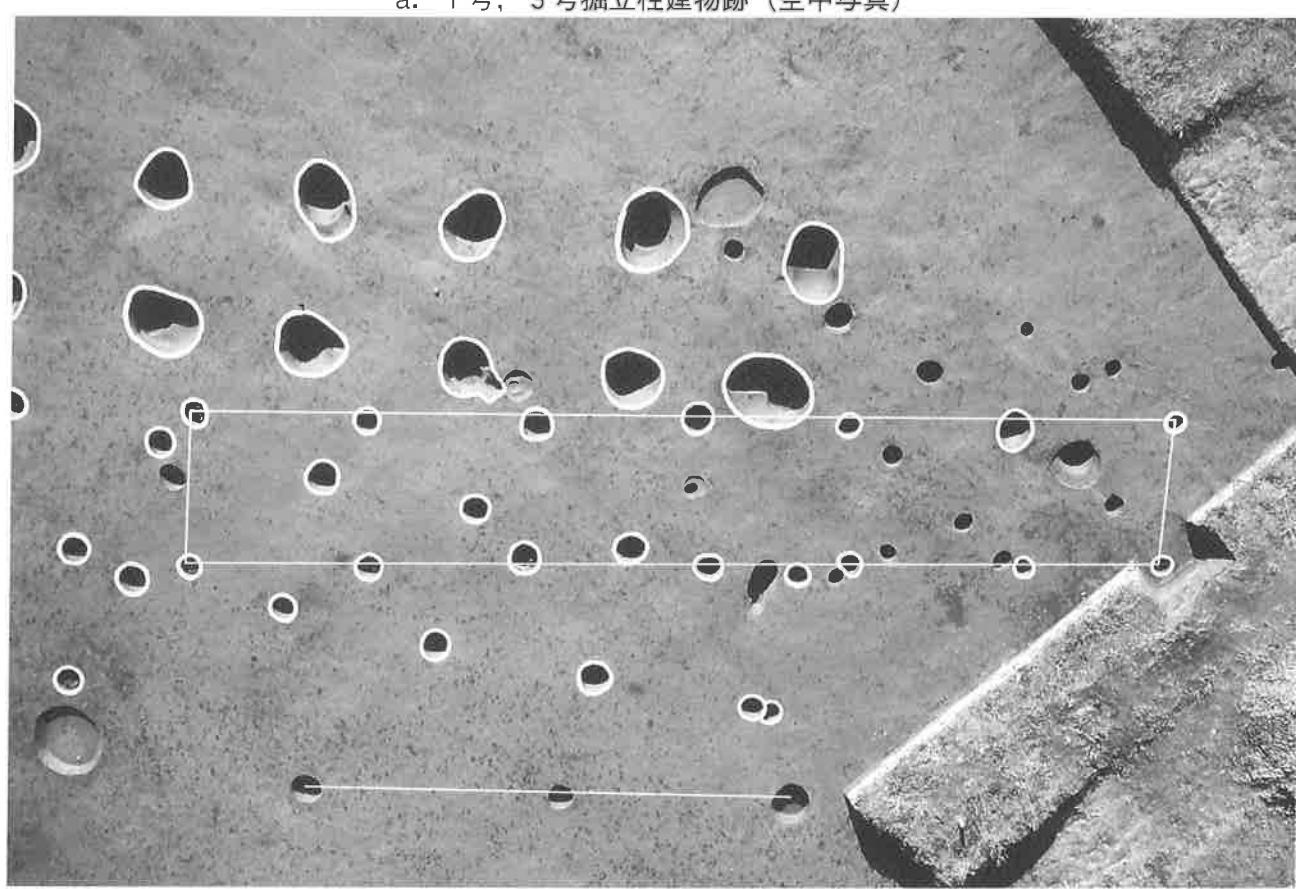
a. 掘立柱建物跡群全景（東方上空から）



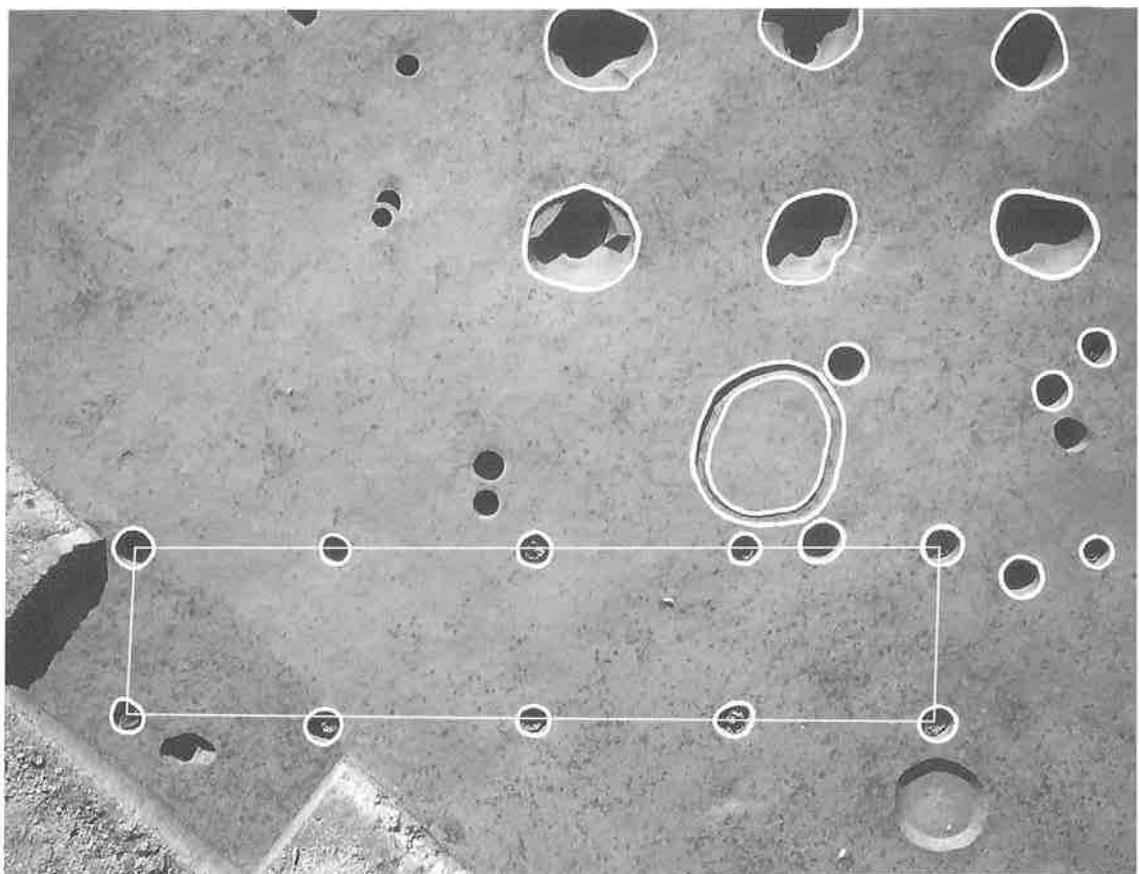
b. 掘立柱建物跡群全景（空中写真）



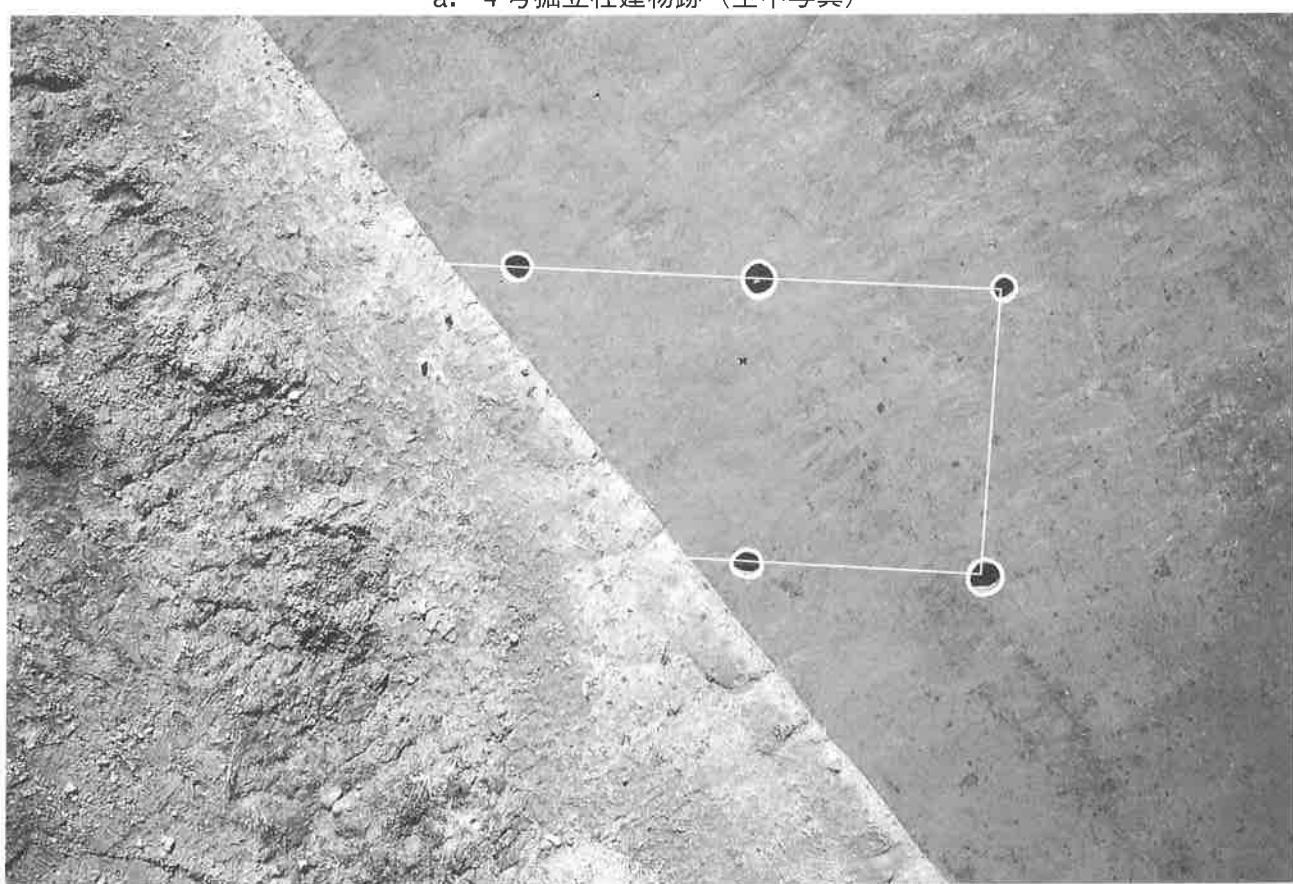
a. 1号, 3号掘立柱建物跡（空中写真）



b. 2号掘立柱建物跡及び柱穴列（空中写真）



a. 4号掘立柱建物跡（空中写真）



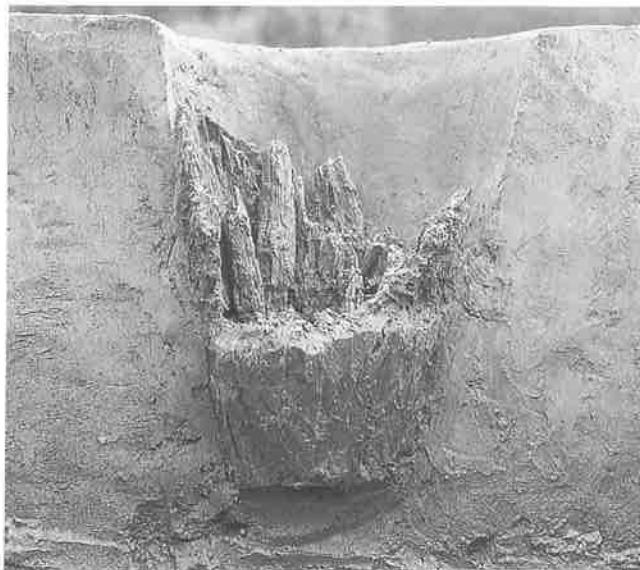
b. 5号掘立柱建物跡（空中写真）



a. 4号掘立柱建物跡柱穴半割状況（西から）



b. 柱穴1半割状況（北から）



c. 柱穴2半割状況（北から）



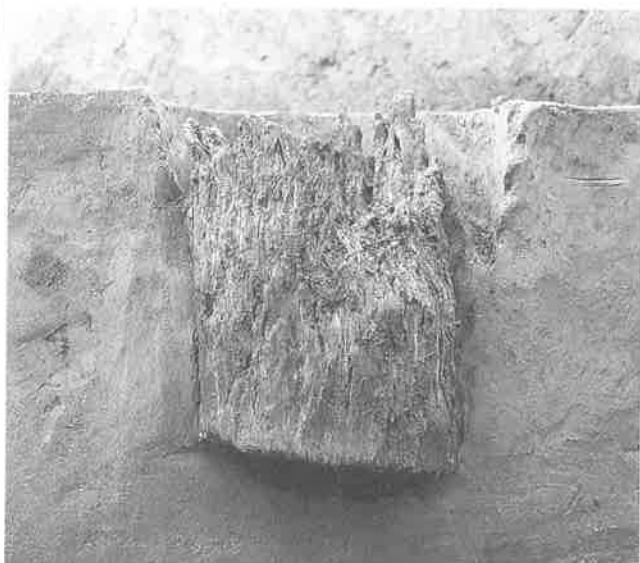
d. 柱穴3半割状況（北から）



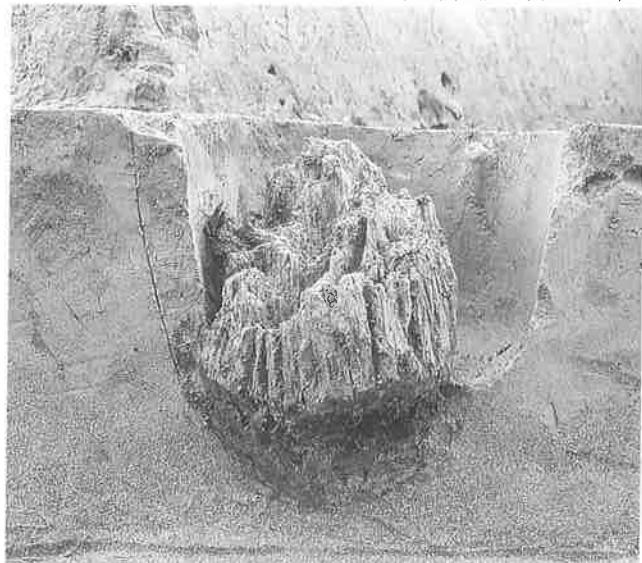
e. 柱穴4半割状況（北から）



a. 柱穴5半割状況（北から）



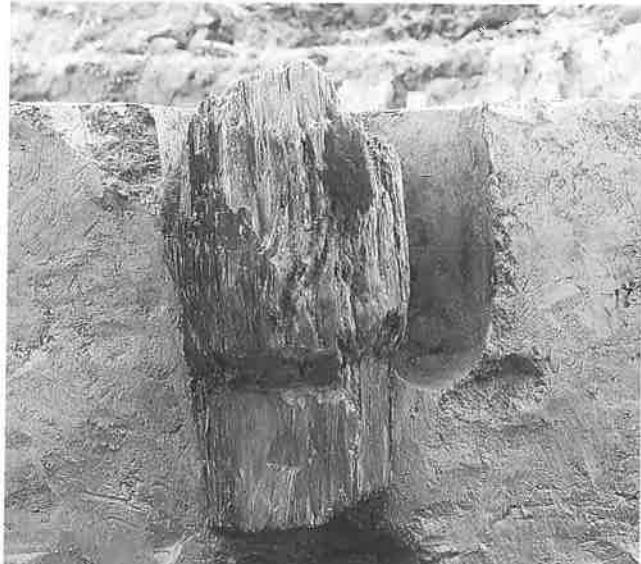
b. 柱穴6半割状況（南から）



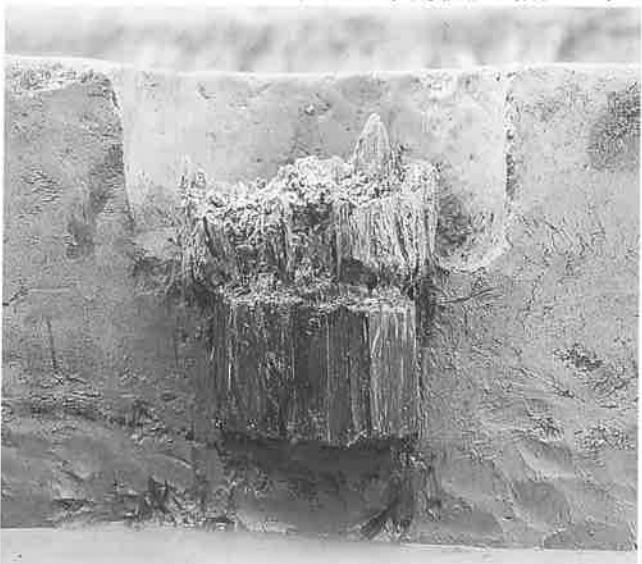
c. 柱穴7半割状況（南から）



d. 柱穴8半割状況（南から）



e. 柱穴9半割状況（南から）



f. 柱穴10半割状況（南から）



1



2



3



4



5



6



7



8

掘立柱建物跡柱穴出土遺物・1



9



9



9



10



11



12



13



14

掘立柱建物跡柱穴出土遺物・2



1



2



3



5



4



6

包含層出土遺物・1



7



8



9



10



11



12



13



14



15



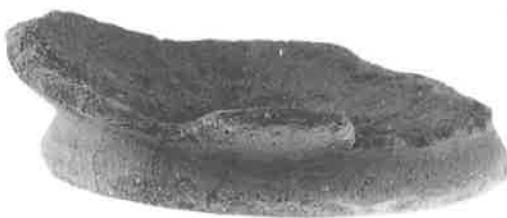
16



17



18



19



20



21



22

包含層出土遺物・3



23



24



25



26



27



28



29



30



31

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かみふかえ こにしいせき
書名	上深江・小西遺跡I
副書名	深江地区ほ場整備事業関係埋蔵文化財調査報告
卷次	V
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書
シリーズ番号	第19集
編著者名	村上 敦
編集機関	二丈町教育委員会
所在地	〒819-1601 福岡県糸島郡二丈町大字深江1071
発行年月日	1998年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上深江・小西遺跡	福岡県 糸島郡 二丈町 大字深江 字小西	40462		33° 30' 45"	130° 9' 20"	1993.07.19 1993.12.24	3,240m ²	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上深江・小西遺跡	建物跡	弥生時代早期	掘立柱建物跡 5棟	刻目凸帯文土器 磨製石鎌	弥生時代早期の 掘立柱建物跡群

